第一場〜発表

ある洋館の応接室、中央まで大きな階段がり踊り場から左右に
分かれて各２階の部屋へ通じるようになっている。
一階、上手側は応接セット、和風の調度品などもすこし見られる。
晩餐会が催されている様子。まだ夕方前で外はほのかに明るいが、
夜会用の燕尾服を来た紳士が数人、中庭を眺めている。
下手側は玄関に通じるであろうポーチ、その横に立派な電話室。
その中でひとりの男が電話に向かって喋っている。
男は初秋の出で立ち。スーツにハイカラーのシャツといかにも
ハイカラボーイらしい洋装だが、タイも結んでおらず、髪はぼさぼさで
少々野暮な印象。手には大きな皮の鞄、書類をたくさん抱えながら話をしている。

木原　そうです。だから待って下さいよ！いやまだ間に合うでしょう！
今ですか、大蔵男爵のサロンにお邪魔してます。はいそうです・・
どうやら今夜のこの内輪のパーティで何か発表するようですよ。
いや、だから分かりませんが締切ギリギリまで待って下さい。
デスク、大蔵男爵はこれまでにも文化人として
国民を大いに驚かせるようなことをやってきたんですよ。
今夜は文部省のお歴々も一緒にいるところから絶対なにかあると
思うんです。一段でいいから朝刊の枠は空けといて下さい！
本当ですか？助かります、大丈夫必ず何かやってくれますって、
彼はお祭り男の異名をとってるんだ、何もないのに俺のような
新聞記者まで呼びゃしませんって！はい分かりました。お願いしますよ！
いいぞぉ忙しくなりそうだ。

木原が話をしている間に、男爵令嬢の莉奈が電話口に近付いている。
木原は気がつかなかった様子で、彼女が真後ろに立っているので驚く。

莉奈　（男の声色で）木原くん、枠は獲れたかい？
木原　ええ、デスクが開けておいて…（振り向く）なんだ、あなたか。
莉奈　騙されたの？
木原　まさか！
莉奈　負け惜しみね。
木原　相変わらず可愛くないですね。
莉奈　失礼な方。

木原　お父様は？
莉奈　もうすぐ降りていらっしゃるわ。なんだか大事みたいね。
木原　俺もそう思います。

木原は莉奈を眼中に入れていない。残念そうな莉奈
そこにドヤドヤと数人の男が下りてくる。
燕尾服に柄物のベスト、白い蝶ネクタイと正装の出で立ち。
大蔵男爵の秘書官、宮下義春が先に小走りに下りてきて木原を見つける。

宮下　やぁ、木原君、お待たせしました。
（一緒にいる莉奈を見て）お嬢様、失礼します。
莉奈　忙しそうね、宮下さん。
宮下　申し訳ございません。
木原　宮下さん、いかがです、何かありそうですか？
宮下　なかなか、面白い話だよ。これからサロンでお酒を召し上がるから。君も加わってくれたまえ。
木原　いや、私は記事を頂にきたんで…
宮下　まぁまぁ、男爵はそういう野暮な聞かれ方は好まないんだ。
ちゃんとタイを結んでおきたまえ。（木原に言い残して自分は男爵の方へ）
木原　やれやれ…
莉奈　あの人の言うとうり、ここはサロンよ。タイを結んで。
木原　（嫌そうに）はい、畏まりました。
莉奈　嫌がらないで、手帳を持っていてさしあげるわ。
木原　あんまり俺の傍に居ない方がいいですよ、さっきから男爵令嬢にあるまじき行為だと、白い眼で睨んでる殿方もいますからね。
莉奈　そんなに人のことだけが気になるなら持たないわよ。（手帳を投げる）
木原　なんだい、急に？

２回から恰幅のいい中年男性が降りてくる。
この館の主、大蔵建造男爵である。
眼光鋭く、大蔵省の次期大臣と噂されるだけあって、豪快な風情であるが、
にこやかな表情。
秘書官の宮下が木原に来るようにと顎で合図してくる。

大蔵男爵　大久保！どうしてオフィーリアを繋いでおかないんだ？
木原　オフィーリア、まだ生きてるのか…

大久保　申し訳ありません、閣下。
大蔵男爵　あのメス犬に噛まれるのはまっぴらだからね。
宮下　閣下、東京日々新聞の木原が偶然来ておりましたので、
お話の場に加わるように申しました。
木原　お久しぶりです、閣下。
大蔵男爵　おお、木原。いいところに来たな！今夜は素晴らしい夜だ。
木原　本日はまた一段とご機嫌がよろしいようですね、
どうなさったのですか？
大蔵男爵　分かるか？さすがにうちの書生だっただけあって私の顔色が
見抜けると見えるな。ははは…いや、機嫌はいい、
実にいいぞ。君もこれを聞けばこの時代に生まれてきて良かったと思うよ。
木原　もったい振らずに教えて下さい閣下。
大蔵男爵　ははは・・・新聞記者は職業柄せっかちだな、宮下。
宮下　はい、閣下。
木原　いや、そうじゃなくて締切の時間があと1時間しかないんですよ。
莉奈　シーッ、そんなことバラしてどうするの？
男爵家なんだから、もっと優雅にお聞きそばせ！
…失敬しましたぁ…
木原　ははは、まぁいいじゃないか莉奈。
大蔵男爵　こいつはいつも本音を吐くから面白いんだ。
そうかそうか、締切があと1時間か、なかなか切羽詰まっているわけだな。
人生にあと1時間しか余裕のない瞬間なんて早々ないですなぁ諸君。

みんな優雅そうに笑う。

木原　（白けた感じ）
莉奈　（面白そう）我慢しなさい。
相手は社交界なんだから、この悠長さに耐えるのが記者の仕事のひとつよ。
木原　冷静に俺を虐めてるね？
莉奈　人の親切も分らないのね。
大蔵男爵　さあ、では木原記者も待っていられないようだし話を切り詰める
かな。・・・宮下。
宮下　はい閣下。では門下生だった木原が締切に間に合わないようでは
気の毒ですから、さっそく申し上げましょうか。
木原　ありがたい。
莉奈　（咳払い）

木原　（作り笑顔で）有難うございます。
宮下　皆さまもご静粛に！
木原記者、よく書き止め給えよ。
実はわが国では明治政府始まって以来の大留学団を英国の
オックスフォード大学に一挙に送り込むことになりました。
木原　大留学団、どういった規模の？
宮下　学者、実業家、医者、大学院生、それに現役の学生など、
１００人です。
木原　１００人いっぺんに？
宮下　もちろん、あなたのような新聞記者の中にも政府から招待される方が
いるかもしれませんよ。政府はなるべく広範囲に渡って国の未来を
担う職業にかかわる者から留学者を選ぶことに決定しましたから。
木原　なるほど、それでいつ頃ですか？
宮下　２ケ月以内には全ての留学者を決定し、天皇陛下のご列席を
賜った晩餐会を催す予定です。出発は来年早々になるでしょう。
木原　それは本当に画期的なことですね。
もちろん大蔵男爵のお考えですか？
大蔵男爵　ははは・・・日本もそろそろ動かんといかんよ。
個人で洋行する者も増え、政府の各省もバラバラにはやっとるが…
世間の評価は「洋行せずして紳士たる者はなし」というくらい留学者を
評価しているというのに、肝心の文部省がその支援もしない
というのはちょっと遅れすぎてるじゃないか。
木原　なる程。
大蔵男爵　そこで、今回の提案を文部省に通し、陛下にご相談申し上げて
決定したのだ。財力なき者であっても政府がそのパトロンと
なるのは当たり前のことだ。
彼らの力がやがて日本のために大きく貢献するのだからな。
木原　ご立派です、閣下のお考えには頭が下がりました。
大蔵男爵　今や、華族や財閥が個人的に学者や芸術家のパトロンになる時代は
終わったのだ。
どんな身分の者でも成績優秀たれば機会を与えなくてはならない。
これが明治政府の新教育である。
開国からわずか半世紀足らずに、ここまで教育の水準を高めたる
のはみな国民の努力であることを陛下はことのほかお喜びなのだ。
今こそ政府が国民のために道を広げる時なのだよ。

大蔵男爵はちょっと自分に酔ってる感じ、興奮して喋っている。
宮下がタイミング良くワインを差し出す。

大蔵男爵　ありがとう。（受け取って飲む）
木原　お待ちした甲斐がありました。
さっそく社に戻って記事を書かせていただきますよ。
白河　あー待ちたまえ、話はこれからだ。
木原　これから？
白河　そうだとも、慌て給もうな！大蔵男爵の素晴らしい
ご提案は今からだよ、君。
木原　あなた方はどなたです？
白河　まぁまぁ、だから慌て給もうなと言うのだ。
宮下　彼らは留学団のリーダー候補者だ。
木原　リーダー候補者？その留学団の団長ですか？
大蔵男爵　そう野暮な名で言うものではない。リーダーと言ってくれ給え。
宮下　閣下はこの留学団のリーダー候補を３人お考えになっておられます。
まず早稲田大学の白河稀人氏。
白河　どうも、白河稀人です。お気付きのことと思いますが私の稀人と
いう名は父が稀なる人になるようにと願って付けてくれた名です。
もちろん今回の留学団のリーダーになるべく賜った名だと自負して
おります。

白河稀人は見た目も派手で、一見紳士であるが、少々過度な感じ。
レースを多くあしらったロココ趣味なブラウスから首がはみ出てるような
前時代的な出で立ち。
しかも、あんまり説明が臭いので一同少しシラける。

宮下　それから、京大の大学院の方で西洋史の研究を
なさっている堤洋一郎男爵。
堤　堤です。若輩者で歴史学のことしか頭にないので、お役に立つとは
思えませんが誠心誠意をもって頑張りたいと思っております。

それに引き換え堤男爵は優雅な貴族といった風情。
シックな燕尾服も黒地に黒の絹糸の刺繍があしらわれ、両家の趣味の良さが
全身からにじみ出てる感じ。

宮下　このお２人と、ただ今遅れていらっしゃるのですが・・・。
木原　で、候補というのであれば、いつリーダーを決定なさるのですか？
宮下　なかなかいいご質問ですな木原記者。
その候補を決定する方法が本日の論点でした。
木原　はぁ…
宮下　政府の主催する今回の留学団のリーダーたる者は日本一の
知識人でなくてはなりません。
人格、学力、精神力抜群たる者でなくては勤まらないものと考え、
リーダー候補者３人に対して、公開試験を行なうことに決定しました。
木原　公開試験。
宮下　決定する試験には陛下のご参列も考えておりますが、
ああ、これは書かないでいただきたい。
ただ前代未聞の学術試合になると考えておりますので、試験
は日本中の知識人の方の前で、公明正大に行なう予定です。
木原　いつ頃ですか？
宮下　１０月３０日に予定しています。
木原　場所は？
宮下　国技館。
２人　国技館？
大蔵男爵　日本の知識は今や国技ですからなぁ、ははは・・・・
木原　これは…事実上「日本一頭のいい男」を選ぶことになるわけだ。
大蔵男爵　いいね、それを見出しにしてくれ「日本一頭のいい男」
木原　了解しました。新聞の読者は飛びつきますよ。
相変わらず、面白いことをなさいますねぇ大蔵男爵。
大蔵男爵　君の言うところの「天下のお祭り男」だからな私は。
木原　これは一本獲られました。ははは・・
しかし、遅れていらっしゃるというもうひとりの候補という方は、
いつ頃いらっしゃるのですか？
大蔵男爵　それなんだ、来るはずなんだが・・なぁ宮下？
宮下　はぁ・・連絡した時にはちゃんと返事がまいったのですが。
木原　出来たら、お３人の顔写真を明日の朝刊に載せたかったのですが
仕方ありませんねぇ…

その時玄関先で声がする。

一郎ちゃん　遅くなりました。私が３人目の候補です。

宮下　おお、お待ちしてましたよ。今ちょうど皆さんを新聞記者に紹介してたところです。どうぞお入り下さい。

大蔵男爵　浅井子爵！よく出てきてくれた。

一郎ちゃん　大蔵男爵のお呼びとあらば、たとえ洋行先からでも参りますとも。

大蔵男爵　ははは・・・頼もしいことを言ってくれるな。諸君、ご紹介しよう、帝大卒業生中もっとも優秀なる成績を納めた伝説の天才、浅井一郎子爵だ。

一郎ちゃん　どうも、浅井一郎です。

堤　浅井？知りませんね・・・そんな名の帝大出身者がいましたか？

一郎ちゃん　帝大在籍中は吉永と申しました。

木原　吉永？・・・吉永一郎！あの２０年前に帝大を半年で卒業してしまったという伝説の天才ですか？

堤　１０年前まで全国の受験生に向けた参考書を出版していた吉永天才？

木原　まさか・・・・生きていたのか？

大蔵男爵　我々の間では、すっかり洋行先で病死したことになっていたのですが…

一郎ちゃん　ははは、君は日本じゃ死人扱いだったようだぞ浅井子爵。そのようですね、１０年日本にいない間にすっかり過去の人間になってしまったようです。

木原　浅井子爵、あなたは今何をなさっていらっしゃるのですか？

一郎ちゃん　さる企業の経営に携わっています。経営学を学ぶために去年まで洋行していたのですが、まさか帰国してすぐにこんな華やかなお話をいただいて、新聞に載せていただくとは思いもよりませんでした。

木原　どちらの方に洋行を？

一郎ちゃん　おもにヨーロッパからアフリカの方です。

木原　アフリカとはすごいな。

一郎ちゃん　見聞を広めることが時代を開くことですから。

木原　なるほど、いい言葉だ。時代を開くですか、いただきますよ。

一郎ちゃん　ええ、どうぞ。

木原　じゃあ、みなさんの写真を撮らせていただきたいので、お３人で。大蔵男爵を囲んで握手をなさっていただけますか？どちらで撮りましょうか？

大蔵男爵　中庭がいいだろう。

木原　中庭、結構ですね。

宮下　みなさん、申し訳ありませんが、ご移動願います。私がご案内致しますので、どうぞ。

一同は宮下について、中庭に出て行く。
莉奈も木原の方を気にしつつ退場。
一郎ちゃんに白河が寄って来る。

白河　浅井子爵、初めまして。白河稀人と申します。
一郎ちゃん　ああ、初めまして。（握手）
白河　僕の稀人という名は稀なる人になるようにと父が付けてくれた名です。
今回の公開試験ではこの名にふさわしくあなたに負けませんから
覚悟していらして下さい。（退場）
一郎ちゃん　…はぁ

今度は堤男爵が近付いてくる。

堤　どうも、浅井さん。
一郎ちゃん　こんばんは。
堤　よく帰っていらっしゃっいましたね。
一郎ちゃん　どういう意味ですか？
堤　いや、洋行先からという意味ですよ。奥様はお元気ですか？
一郎ちゃん　家内をご存じですか？
堤　ええ、昔、うちの叔父がよく晩餐会でご一緒したと思います。
私も子供の頃にお目にかかりました。美しい方でした。いえ、失礼、今ももちろんお美しいと思いますが。
一郎ちゃん　はぁ。
堤　宜しくお伝え下さい。浅井さん・・いえ、浅井子爵。
一郎ちゃん　ええ、伝えますとも。

２人はちょっと意味深な感じで中庭へ。　木原がそれをチラリと見ながら・・・

木原　白河稀人氏は天才を自負して他に譲らず、
堤男爵は冷静なる天才、浅井子爵の出現に内なる炎を燃やしている様子。
はたして日本一頭のいい男は誰ぞ。
よし、これでいいか。しかし、三人ともただならぬ雰囲気だったな。
こりゃすんなり決まりそうもないか。
おっといけない、締切、締切。

皆について外へ出ていく。

第二場〜欠点

洋館の中に和風の家具、趣味がまちまちといった風の家。
応接で浅井一郎夫人、華子が若い男相手に喋ってる。
華子は黄色と黒のストライプ、白のレースをあしらった
少し夏を残したドレス姿。活発な印象。
話し相手は従弟の野口敬治郎。
野口は秋もののスーツにピシッと身を固めて、ハイカラーに
水玉模様のタイをしている。いかにもモダンボーイという感じ。

華子　そうなのよ。だから洋装で出掛ける時は履くものから身に付ける物まで
気をつかうじゃない。
なのに主人ったら平気で燕尾服の下にきまたを穿いたり、
気が付くと靴の中で足袋姿だったり、油断だらけなのよ。
野口　一郎さんははまだ洋服を着馴れていらっしゃらないからしょうがないですよ。
華子　でも一応、洋行帰りなのよ。まさか向こうではずっと着物で通してた
偏屈ですなんて、今更言えないわ。向こうにいる間はずっと
それでも日本人だからって珍しがられたけど、
こっちの社交界の方が洋服で出掛けることを義務付けられてるなんて
思わなかったもの。十年前はそうでもなかったのよ。
まだ紋付をお召になってるご老人も多かったわ。
野口　明治は日進月歩ですからねぇ。ああ、一郎さんと新ちゃんのYシャツも
出来上がってきてますんで、箪笥に仕舞いましたよ。
ネームもちゃんと入ってましたからね。
華子　新吉のも？あらら可愛いでしょうね。子供の燕尾服姿なんて。
でも、きっとあの子また嫌がるわ。父親似で着物派なのよ。
野口　ははは・・そりゃいいや。
華子　ノンちゃんがいてくれて助かるわ。銀座のどこに何があるかも
分からなくなっちゃって。お店も増えてるしねぇ。
野口　持つべきものは遊び人の従兄弟って奴でしょ？
この箱は何です？
華子　ボルサリーノよ買ったの！いいでしょう、
やっぱり男物の帽子はここのでなくちゃ。
野口　華子さんいったい帰ってきて、お幾らぐらい遣われたんです？
知りませんよ、一郎さんがまた怒っても。
華子　あら、いるものはいるからいいじゃないの。

野口　そんなことおっしゃっても、懐中時計なんかもう６つもあるんですから。
ロンジン、オメガ、エドックス、モーリス、ウォルサムにローレックス。
まさか全部現金でお買い上げで？
華子　ノンちゃんにもひとつあげるわ。どれが好き？
蓋付きのエドックスになさいよ、あれ男らしくて格好いいわよ。
でも若いから薄型のモーリスかしら？
野口　いや、結構です。
華子　分かったわよ。でも女から浪費を取り上げたら何も残らないってこと
知らないの？
野口　やれやれ。

玄関先で車の音。

一郎ちゃん　やあ、本当にありがとうございました。助かりましたよ、それでは。

一郎が帰ってくる。

一郎ちゃん　ただいま。
野口　ああ、一郎さん、お帰りなさい。
華子　お帰りなさい、あなた。早かったのね。汽車がつくにはまだ随分間が
あることよ。
一郎ちゃん　自動車で送ってもらった。
華子　え、自動車で？フォードＴ型でした？新しいのならきっとそうだったでしょ、
ねぇ？
一郎ちゃん　あ～もうアカン！辛抱たまらんで、この靴！
野口　あーあ、もう靴がメチャクチャだ。
一郎ちゃん　何が靴や、メチャクチャなんはわしの足や。
そやから洋服着て行くんは嫌や言うたんや。
野口　華子さん、一浪さんの足、ひどい靴擦れですよ。
華子　あらら、可哀相にあなた…痛い？
一郎ちゃん　痛いに決まってるやないか、こんな硬いもん履いたら。
野口　だから一文字飾りになさった方が良かったんですよ。
一郎さんなら靴はなんでもお持ちなのに、お洒落に履くならケーブルアップ。
ちょっと気取ってウイングチップ。
だいたいこのサイドゴアブーツはこれ乗馬用ですよ。
これだったらコンビネーションの方がまだましだ。

一郎ちゃん　ああ、もうごちゃごちゃ言うな。
　お母ちゃん、茶漬け作って。
華子　え？なんですって？
一郎ちゃん　茶漬け、ブブ漬けや。ほんでこの洋装脱がして。
野口　洋装って・・ははは・・・着心地はいかがでしたか？
一郎ちゃん　ええわけないやろ！
野口　そんなぁ、これ松阪屋で作った最高の・・・・
一郎ちゃん　おのれはわしに喧嘩売っとるかー！
華子　おやめなさいよあなた、ノンちゃんに罪はないでしょう？
一郎ちゃん　何がノンちゃんじゃ、チャラチャラしくさって、この男女が！
華子　あなた、口が悪いわよ。
一郎ちゃん　分かった、分かりました。そやから頼むから茶漬け作ってぇな。

　そこに奥の部屋からひとりの少年が登場。
　一郎ちゃんの息子で新吉。
　かすりの着物に袴姿。　学生帽をかぶっている。
　丸いメガネが顔からはみ出しそうな　感じで１０歳前後。

新吉　お茶漬けできたで。
一郎ちゃん　おお、新吉。助かった、ようやった！はよ持ってこい。
新吉　持ってきて下さいって言わなあげへん。お父ちゃんは子爵さまやねんから言葉遣いには気ぃつけんとな！
一郎ちゃん　堅いこと言うな。あ～助かった。

　一郎はお茶漬けをはぐはぐと食べだす。

華子　あら、新ちゃん。帰ってたの？
新吉　さっきお勝手から入ったんや。お父ちゃんが外で車から下りてきて誰かと喋ってたから、入りにくかってんもん。
一郎ちゃん　おお、そうか。すまんな、新吉。あれ新聞記者や。
新吉　新聞記者？
一郎ちゃん　足が痛とうて歩かれへんかったからな。自動車で送ってもろうたんや。
新吉　ふーん。
一郎ちゃん　あーっ新吉、お前また茶漬けに梅干し入れたな。
　わしは酸っぱいのんあかん言うてるのに
新吉　体にええから食べ。

一郎ちゃん　あかんねんって、こんなもん体に悪いぞ。梅干しいうたら塩の塊みたなもんやねんから
新吉　ほんなら、これから自分でつくりぃな。もう作ったれへん。
一郎ちゃん　一生じゃ、一生！（退場）
華子　こら、新吉！ほんまに可愛いないのう最近。
一郎ちゃん　今日は新吉の勝ちよ。
華子　なんやそれっ。
（足に当たった箱に気がつく）
一郎ちゃん　あれ？何やこれ・・・あれれ？浅井一郎さまって・・何やこれ？
華子　ああ、これ、いいでしょう誂えたのよ。モーニングコートのスーツ。
一郎ちゃん　あなた後で着てみせてね。
華子　誂えたってまたかいな？ここ1週間ちゅうもん買物だらけやぞ。
一郎ちゃん　そんな金どこにあるねんな。
華子　大丈夫よ、いざとなったら実家に請求書回すから。
一郎ちゃん　アホ言うな、ちょっと待ってくれよ。そんなことするなよ、お母ちゃん。わしらは駈け落ち者やねんで、それを死ぬ前にお父さんが許してくれはったんやないか。
華子　そうよ、そしてあなたは浅井家に婿入りした現当主なのよ。これからは華族の家の長として暮らさなくてはならないの。社交界にだって出入りしなきゃいけないわ。
一郎ちゃん　それでタキシードなんかい？
華子　洋装は紳士の基本ですもの。
一郎ちゃん　結婚する時にそんなこと聞いてへんぞ。
華子　私を詐欺師扱いするつもり？
一郎ちゃん　いや、そういうわけやないけど・・・服嫌いなんや。
華子　そうスネないのよ。これからはその洋服を着てダンスだって踊らなきゃいけないんだから。
一郎ちゃん　わしがかい？留学団のリーダーになるちゅう試験は面白ろそうやらええけど、この格好は永遠に続くんかいな。
華子　そうそう、それであなた試験はどうなの？
一郎ちゃん　どうって、これからや。京大の堤と早稲田の白河とか言う奴と三つ巴で公開試験受けることになるらしいわ。
野口　へぇ、堤さんも入ってるんだ。さすがだな。
一郎ちゃん　知り合いかい？
野口　というか、子供の頃からのお付き合いなんですよ・・家同士が。華子さんもご存じですよ。ねぇ？

華子　ええ。
野口　大蔵男爵に、堤男爵と華族議員の家系の人が揃ってるんじゃ
文部省も本気ですねぇ・・で、その公開試験って？
一郎ちゃん　国技館でやるんやて、話大きいやろ？わし顔は格好つけとったから
我慢しててんけど、もう笑いそうでなぁ。
華子　それに負けたらどうなるの？
一郎ちゃん　負けるわけないやないか！よう考えてみぃ勉強の試験やで。
この浅井一郎が勉強で人に負けたことがあると思うんか？
華子　でも現役を１０年も遠ざかっていたのよ。そんなにうまく行くの？
もし、試験に落ちたら・・・
一郎ちゃん　わぁ・・・何を急に言うねん・・・はぁはぁ・・あービックリした。
華子　あら、ごめんなさい。あなたつい言っちゃったわ。あんまり気になったんで。
一郎ちゃん　それだけは言うな、わしの弱点なんやから。
野口　何です？
華子　この人、現役の大学生だった頃から試験に落ちるとか滑るとか言う言葉に
異常に敏感なのよ。
一郎ちゃん　わぁー、止めろっちゅーとるやろぅ！
野口　ああ、学生なんかが縁起を担いで禁句にする言葉ですね。
「流れる」とか「破れる」「崩れる」「落ちる」って奴だ。
はははは・・・そりゃ知らなかったなぁ「スルメを摺り鉢で摺る」なんて、
言えませんねぇここじゃ。
一郎ちゃん　はぁはぁ・・・貴様・・・わしに洋装させとった時から
気にいらんかったんや・・・覚悟はええなぁ・・・
華子　あなた。
野口　一郎さん冗談ですよ・・・あの
一郎ちゃん　ええか、これからスルメはアタリメ、摺り鉢は当たり鉢。硯は当たり石と
言え！そやからさっきのは「アタリメを当たり鉢で当たる」じゃ。
華族のくせに忌み言葉ちゅーもんを知らんのかぁ。
野口　分かりました、分かりましたよ。そんな本気にならないで・・・
話し合いましょうよ、ね？
一郎ちゃん　やかましい！お前みたいなモボと話なんかあうかいっ。
野口　いやー、こりゃまた滑っちゃったなぁ。
一郎ちゃん　あーっ、止めろ言うとんのじゃー！

面白がる野口を追い掛け回す一郎ちゃん。
その時、玄関の呼び鈴が鳴る。

華子　　もう、よして下さいよ2人とも。はいはい、ただ今・・・

華子が玄関先から何か手にしてすぐに戻ってくる。

華子　　あなた、電報ですよ。文部省から・・・

一郎ちゃん　文部省？何や・・・スグ　コラレタシ　リュウガクダン　ノ　シケンニトビイリサンカシャ　アリ　ヨウ　ゴソウダン。

野口　　どういうことです？

一郎ちゃん　何か分からんけど、行ってみるわ。お母ちゃん支度や。

華子　　はいはい、じゃあどの服着て行きます？

一郎ちゃん　あー、そうかその前に靴擦れの薬買うてきて。

暗転。

第三場～参加

新聞記者、木原が電話室から会社の電話を掛けている。
急に呼び出されてきたようで、喋りながらしきりに髪をとかしてネクタイを気にする。

木原　そうです。さっき呼び出されて聞いたんです。
　　え？参加の理由は分かりません。たぶん今からそのご説明があると
　　思うんですがね。
　　はい、確かですとも。高瀬宮殿下のご参加はご自分の意志だということです。
　　これで、ますます例の公開試験が面白くなってきましたね。
　　なんせ皇族の参加ですから重みが出ましたね。
　　それに高瀬宮は社交界一の花形で一般市民にも人気のある
　　モダンボーイですから、
　　洋行する留学団のリーダーを決める試験には格好の参加者です。
　　あ、大蔵男爵が下りていらっしゃっるみたいですから、切りますよ。
　　はいこれが終わったら戻りますので。

2階から莉奈が下りてくる。

木原　なんだ、あなたか…
莉奈　いつも「なんだ、あなたか」っておっしゃってばっかり、ご挨拶ね。
木原　宮様の情報は本当ですか？
莉奈　知らないわ。
木原　俺にはとことん意地悪だな。
莉奈　あなたが、私をとことん無視するからだわ。
木原　…無視なんかしてませんよ。
莉奈　嘘つき、この家に居た時は兄妹みたいに可愛がって下さったのに
　　新聞社に勤め出したとたんに、まるで他人みたいだわ。
木原　この間なんか男爵令嬢だなんて呼んだわよ、どういうおつもり？
莉奈　やれやれ…そんな説明は勘弁願いたいな。
木原　私のことが嫌いになったのね？
　　好きも嫌いも関係ないでしょう。
莉奈　あなたは男爵令嬢、俺は一介の新聞屋です。
木原　嘘みたい…あなたの口から、身分の差の話を聞くなんて。
莉奈　……
　　あんなに理想に燃えていたくせに、子供の私に

この時代に生まれて幸せだっておっしゃったくせに。
木原　嘘は言ってない。
莉奈　じゃあ、なぜ私を以前のように扱って下さらないの？
木原　あなたは守られてる。時代に、親に、この家に。
それに比べて、俺はまだ裸同然だ。
そんな俺があなたを呼び捨てにしてみなさい。
世間はなんと言うと思います？俺はよくても、あなたは…
莉奈　では、裸じゃなくなるのはいつなの？
木原　…困らせないでほしいな…
莉奈　やっぱり意地悪ね。

そこに大蔵男爵と宮下が２階から下りてくる。
莉奈は作り笑いをして退場。

大蔵男爵　おお、木原、来てくれたか。
実は今、高瀬宮様が内々にここにいらっしゃっているんだ。
この宮下と学生時代の同級の関係にあってな、直々にご連絡なさっていらっしゃった。
木原　宮下さんと。
大蔵男爵　そこでだ、宮様の参加意志に対する記事を取材して書いてくれないか。
木原　俺、ひとりがですか？

大蔵男爵はそのまま答えずに２階の方へ上がっていってしまう。
宮下が不思議そうな木原を捉える。

宮下　これは閣下が君を信頼しているということさ。（少し小声で）
なんせ、高瀬宮さまは天皇陛下のまた従兄弟さまに当たられ、
皇位継承第１２位ではあられるが、実際には陛下ご自身の
お種といういうお噂だ。
木原　お種…
宮下　ほかの皇位継承者の方々とはまた格別違った身分のお方なので、
あまりあちこちの新聞社にはあまり近付いてもらいたくないんだよ。
特にベテラン記者にはね、彼らは自分の意見を書きたがるだろう？
なる程…駆け出しの俺は馬鹿だから正直に書いてしまっても
木原　仕方ないという筋書きですか。
宮下　新聞記事は楽しく、庶民に分かりやすい方がいいだろう？

なんせ、こんなに華やかな話なのだから。
木原　承知致しましたよ。
宮下　さすがは木原、物分かりがいいね。
　　ではタイをきちんと結び給え。今夜は嫌がらずにな。
木原　それで、高瀬宮さかはどんな方なんですか？

（大蔵男爵が入ってくるのが見える）
宮下　閣下、木原がここで宮様に偶然にお目にかかったことにして、
　　書くと申しております。
木原　宮下さん！もっと情報を下さいよ・・・
大蔵男爵　そうか、それは良かった。
木原　あ、はい。私を信頼して下さって有難うございます。
大蔵男爵　もし、他社の者が騒ぎだしたら、次回に…

そこまで言いかけると、大久保が高瀬宮を案内して入ってくる。
２階の奥から背の高い青年が登場する。
いかにも身分の高そうな上品な物腰、上等の英国風のスーツを着ている。

宮下　これは高瀬宮様、今お迎えに上がりますところでした。
高瀬宮　うん、いいから話を続けて下さい。

木原は少々緊張した様子でネクタイを正して下座の方へ寄る

宮下　いえ、話はもう終わりましたので高瀬宮様、こちらは関東新聞の記者で
　　木原雄吉と申す者です。
木原　お目にかかれて光栄でございます、高瀬宮様。
高瀬宮　うん。
宮下　本日はこの者が新聞を代表して、宮様の今回の試験にご参加なされる
　　お気持を、お聞きいたします。
高瀬宮　分かった。宜しく頼みます、木原。
木原　はい、かしこまりました。
高瀬宮　で、何から申し上げたらいいのかな？私から話すのか、
　　それとも聞いてくれるのか？
木原　僭越ながら…私からお聞きしてよろしゅうございますか？

宮下が止めようとするが高瀬宮が手でそれを制して

高瀬宮　良い、質問させ給え。
宮下　は・・・
木原　では、ご質問いたします。
高瀬宮　うん。
木原　この度の公開試験にご参加の意、私どもは本当に驚いております。
いかに知識人の集まりとは申せ、学力を競う大会に宮様ご自身が
比べられる側にお入りになるというのは、どういうご意図でしょうか？
高瀬宮　私はこの学力を人前で競うという試験に非常に興味がある。
人前なので公明正大に戦えるし、試験の前では私とて一介の受験者、
４人のうち最下位でも文句は言えない。
木原　最下位になることも厭わないとおっしゃるのですか？
高瀬宮　最下位といっても、日本で４番目に頭のいい男だったら構わないとも。
ははは・・
木原　なるほど、宮様のおっしゃる通りです。
高瀬宮　それに我々、皇族は最近どうも政府に守られて過保護になりがちのような
気がしている。
陛下ご自身が切り開いて下さった時代を
我々一族の者も広げて行くのが勤めというものだ。
皇族の血を引く者が軟弱では困る。学力日本一ぐらいになれないようでは
自由国家も長くは続きません。
大蔵男爵　宮様！
高瀬宮　失礼、どうも若輩なので・・・言葉は補っていただきたい。
木原　かしかまりました。ではもうひとつお聞きします、
３人の中で一番の強敵は誰だとお考えですか？
高瀬宮　浅井でしょう。
木原　浅井一郎氏ですか？
高瀬宮　私も彼の本を読んだことがある。
平民でありながら独学で勉学に勤しみ、自らの知恵でお金を稼いで
帝大入学の資金を作ったという・・・
彼の人生は痛快だね。何でも子供のころに縁日で算術を見せ物にして
家計を助けたとか・・・
木原　なるほど、浅井一郎子爵と宮さまは、まさに対極ですね。
高瀬宮　どうせ、やるなら浅井とやりたい。でないと日本一になった気がしません。

宮下、木原にめくばせして合図する。木原は察して

木原　では…
宮下　木原。そのへんで

宮下が目配せをして木原を止める。

木原　高瀬宮様、ありがとうございました。非常に参考になりました。
心すくお言葉感激致しました。
試験は…大いに羽を広げて闘って下さい。
高瀬宮　ありがとう。そうしたいと願っているとも。
宮下　それでは宮様、お送りいたしますので…
高瀬宮　うん。では木原…雄吉君。ごきげんよう。
木原　失礼いたします。

大蔵男爵と木原は玄関まで送って行こうとするが、高瀬宮がそれを押し止める。

高瀬宮　いや、見送りはいい。ここにいなさい。
２人　ありがとうございます。
高瀬宮　まだ結婚はしてないのかい？
宮下　それが・・・

宮下の案内で高瀬宮が出ていく。

木原　ふーぅ…物凄い風情の若者ですね。
大蔵男爵　さすがの木原もたじたじか？
木原　いや、しかし…
大蔵男爵　なんだ？
木原　久しぶりに欲のない男を見ました。
大蔵男爵　ははは…そうだろう。あの宮だけは確かに別誂えだよ。ここだけの話ね。
だが、えらいことになってきたなぁ。
木原　閣下が仕掛けられたんですよ。
大蔵男爵　ははは…それにしても面白いなぁ木原！
木原　はぁ？
大蔵男爵　人生には展開がある。それが面白いのだよ、何事もとどまったままではない！
それが近代という世の一番素晴らしいところではないか！
木原　閣下はいつも前向きで、こちらが元気になりますよ。

大蔵男爵　なんだ、お前でも元気をなくすこともあるのか？
木原　…ええ、たまにはね。
大蔵男爵　ははは…しかし元気だけでは乗り切れんかもしれんな…
木原　え？
大蔵男爵　宮を勝たせるわけにも、負けさせるわけにもいかん、
という難問にぶつかりそうだ。
木原　閣下…

考えながら奥へはいっていってしまう大蔵男爵。
木原は頭をかきながら記事を考え始める。

第四場～雑学

新吉がひとりで何か読んでいる。
そこに一郎ちゃんが２階から下りてくる。麻地の着物姿に
へこ帯という和風の姿。

新吉　　そうして、船はマグマに乗ってアイスランドにでたのであります。
ふーん・・・アイスランドって・・これか・・
一郎ちゃん　ふぁー・・・お早ようさん。何をブツブツ言うとんねん朝から。
新吉　　お父ちゃん、お早よう。
一郎ちゃん　お茶おくれ・・
新吉　　うん。

新吉はバタバタと父親の世話をし始める。

一郎ちゃん　なんや、またＳＦ小説を読んどるんかいな・・
なになに、冒険小説「地底旅行」か、ふーん…どこが面白いんやこんなもん。
新吉　　面白いでジューヌヴェルヌ。これ最後に地底火山からマグマに乗って地上に
帰ってこれるねんで。
一郎ちゃん　ああ面白かった。あほか！お前最低やな。
小説の最後だけ言うたら誰が読みたいと
思うねん。
新吉　　どうせ読めへんやろう。
一郎ちゃん　ほんまに読んでほしいと思ったら、
その気にさせるような言いようがあるやろ。
新吉　　ごはん食べる？
一郎ちゃん　うん。目玉焼き焼いてくれよ。あ、目玉は２個でかた焼きやぞ。
わし、ちゅうちゅうするのん苦手やねんから。
新吉　　分かってるって。
一郎ちゃん　お母ちゃんはどこ行ったんや？
新吉　　ノンちゃんお兄ちゃんと銀座。
一郎ちゃん　ノンちゃんってお前までその名前で呼ぶか・・・
銀座な…また買物してきよんのとちゃうかぁ…

そう言いながら新吉が読んでる本をパラパラと見る。

一郎ちゃん　何じゃこら、「さんたくろう」ふーん。

なになにジューヌヴェヌル…さっきのおっさんやな
「月世界旅行」「空中旅行」「海底旅行」旅行好きやな。
お、日本人のもあるやないか。押川春浪（おしかわ　しゅんろう）
春の波と書いて春浪か、粋な名前やな。「海底軍艦」何やこいつも海底かいな。
なんや新吉、あいつこんなもん読んでどうするつもりなんや？
お待たせしました。

新吉　新吉、何やねんこの本の山？

一郎ちゃん　目玉焼きかたいで。

新吉　おう、いただきます。（ちゃんと手を合わせていただく）

一郎ちゃん　こういうところはお母ちゃんより行儀がええねんけどなぁ。

新吉　何を生意気なこと言うとんねん。醤油とってくれ。

一郎ちゃん　うん。

新吉　お前こんな変な本ばっかり読んで何になるつもりや？

一郎ちゃん　まさか空飛んで、月に行って、地面潜って、火山から出てきたいとか言出すんやないやろな？

新吉　何それ？

一郎ちゃん　いや、まぁ・・な・・ちょっとした親心や。

新吉　話あっちゃこっちゃやで、お父ちゃん。

一郎ちゃん　ちょっとはまともな本も読めよ。勉強するとかやな、お父ちゃんの子やろ！

新吉　ちょっと最近反抗期やねん。

一郎ちゃん　なんじゃそら、親に直接言うなよそういうこと

新吉　だって、直談判した方が早いやんか。

一郎ちゃん　なる程なぁ・・・おー味噌汁上手いわぁ・・・お前の作った味噌汁は世界一やで新吉。（涙ぐむほど美味しい様子）

新吉　僕の話聞いてる？

一郎ちゃん　聞いてる、聞いてる…そやけど、このお口いっぱいに広がった、おふくろの味をもうちょっとだけ味あわせてくれ・・・

新吉　ぼくは息子やちゅーねん。（さっさとお碗を取り上げて奥へいく）

一郎ちゃん　なんや、冷たい奴やなぁ・・・・

新吉　はい、お代わり。

一郎ちゃん　何やねん、何を反抗してるんや？言うてみぃ。

新吉　お父ちゃんの生きてるテーマって何？

一郎ちゃん　テーマ？何や急に・・・・そんなもん金儲けに決まってるやないか。

新吉　それは分かってる。でもほんならなんで洋行したん？

一郎ちゃん　金が溜まったからお母ちゃんと駈け落ちしたんや。
ほんでお前がエジプトで生まれたんやないか。

新吉　ほんなら何で今更日本に帰ってきて華族になったん？
　それが分かれへんねんけど。
一郎ちゃん　アホ。お前なぁ、華族ってお金持ちやねんぞ。
新吉　だってお父ちゃんのお金とちゃうもん。あれはおじいちゃんのお金やんか。
　あんなん使ったら嫌や。
一郎ちゃん　お前は・・可愛いなぁ新吉、お父ちゃんが自分で儲けた金以外は遣うてほしないんか？
新吉　うん。
一郎ちゃん　新吉、お前…ほんまに…アホやなぁ！
新吉　え？
一郎ちゃん　あのジジィの金なんかビタ一文遣うかいな、借りとるんや。
　浅井家の名前と財力を借りてみぃ、でっかい商売が出来るぞう！
　例えば今度の試験に優勝してやで、洋行する留学団のリーダーになってみーな。それにあやかって商売するんや。
　もう洋行する１００人分の石けん、歯磨き粉、煙草は誂えてあるんや。
　「祝、オックスフォード親善留学」いうネーム入りやで。
　あと、食堂のバターにも、そのネーム型抜きさせてあるで。
新吉　安いもんばっかりやな。
一郎ちゃん　アホ言え、よう考えー、消耗品ばっかりじゃい。石けんも歯磨き粉も毎日減っていくからみんな２つ目も買わなあかんやろう。
　第一ものが手軽やから記念にとか、親戚にもとかいうて一ダースぐらいすぐに買いよるで。
新吉　なるほどなぁ・・
一郎ちゃん　高めのもんも作ろうか？わしの肖像画が入った懐中時計なんかどうや？
　一個、五十円や。
新吉　高いわ、巡査の給料でも三十円ぐらいやで。
一郎ちゃん　アホ、時計なんちゅうもんは高い方がよう売れるんや。
　あんなもん買うたとしても一生に一個か二個やねんから。
新吉　お母ちゃん、この間から６個ほど買うてきたで。
一郎ちゃん　ああ、お母ちゃんなぁ・・・何ちゅーたかて、あの人の浪費癖はもう一生もんやな。
新吉　何で何もいわへんの？
一郎ちゃん　あの人はあれでええんや。わしが稼ぎたがるのは金のためやない、金儲けのためや。ええかここの違い分かるか？
新吉　何となく・・・
一郎ちゃん　わしが喜んで稼いだ金を、嫁はんが喜んで遣うてまう。

ああ、夫婦ちゅーもんは上手い事できたあるなぁっと思うたら
怒る気にもなれんわ。
新吉　何やかんや言うても惚れとるしなぁ。
一郎ちゃん　そやなぁ・・・って何を言わせるんじゃ、こら！
新吉　きゃははは。
一郎ちゃん　何や、ほんで反抗期はもうええんか？
新吉　うん、満足した。
一郎ちゃん　何や安いなぁ、お前の反抗期。それでええんかぃ！
ほんならついでに聞くけどなぁ、新吉のテーマはなんやねん？
新吉　ぼくのテーマ？
一郎ちゃん　人に聞いて、自分はないとか言うなよ。
新吉　ぼくのテーマは・・・収集。
一郎ちゃん　なんじゃそら？
新吉　写真とか、マッチの箱とか・・ラベルとか・・
洋服のカタログとかを集めて楽しむこと。
一郎ちゃん　どうやって儲けるんや？
新吉　情報誌とか創ろうかな。ぼく将来はオモチャの鑑定師になるねん。
一郎ちゃん　変わってるとは思うとったけど、お前は変わってるなぁ。
何が面白いねん、そんなもんになって？
新吉　雑学って知らんのお父ちゃん？
一郎ちゃん　何やそれ？
新吉　だから銀座のどこに何を売ってるとかいう地図とか、メガネの形とか、
パーラーの名前とか・・生活に密着した雑学やん。
アメリカとかにはあるねんで。
一郎ちゃん　そんなもんは情報や、学問やない。
新吉　今に学問にも商売にもなるよ。近代史は雑学抜きには語られへんもん！
一郎ちゃん　生意気なことぬかしよんなー
新吉　これ、よかったら読む？
一郎ちゃん　何や？
新吉　イギリス人の書いた用語辞典。生活に密着した道具の各部分の名称が
書いてあるねん。
一郎ちゃん　そんなもん知ってどうするねん。
新吉　言うたな！じゃあ聞くけどヴァイオリンの頭のとこ、
なんて言うか知ってる？
一郎ちゃん　頭のとこ？ヴァイオリンってこう持つやろ・・・弦を巻いてある
この先のことかい？・・そんなもん知るか！何ちゅーねん？

新吉　渦巻き。
一郎ちゃん　喧嘩売ってるんか、お前は。
新吉　だって言うねんもん。じゃあ椅子の頭のここは？
一郎ちゃん　椅子あたま？
新吉　耳。
一郎ちゃん　喧嘩売ってるやろう、お前。
新吉　だって言うねんもん。じゃあこれは？（指差す）
一郎ちゃん　これは…浅井一郎子爵
新吉　違うやん、僕の爪の先の白いとこ。
一郎ちゃん　シロツメ草。
新吉　自由縁
一郎ちゃん　なんで自由縁やねんこれが！
新吉　自由な縁側って感じやんか、ここだけ身がついてへんかって、な？
一郎ちゃん　ほんまにお前と話してたら年感じるわ・・
新吉　さみしい？ぼくが大学とか行けへんかったら・・・
一郎ちゃん　分からん、お前にはお前の人生じゃい！わしの好きにはならん！
新吉　ありがとう、お父ちゃん。
一郎ちゃん　そやけど、たとえお前が将来、その雑誌作るいう話で相談にきても、
　わしは一銭も出さんからな。
新吉　ケチ！お父ちゃんかってお祖父ちゃんのお金を借りるんやろう？
　ぼくかってお父ちゃんに融資してもらう権利があると思うわ！
一郎ちゃん　嫌なガキやなぁ、変な知恵だけサッサとつけよって。
新吉　お父ちゃんの子やからなぁ。
一郎ちゃん　生意気なこと言うなっ。

２人が楽しそうに話ているところに華子と野口が帰ってくる。

華子　あらら、お食事してたの？
新吉　お母ちゃん。
華子　ただいま。新ちゃん、お母さんにもお茶いれて。暑くって・・・
新吉　うん。
一郎ちゃん　また何か、ぎょうさん買うてきたなぁ・・・
華子　大丈夫よ。まだまだ、あなたのお金だから。実家のお金じゃなかったらいい
　でしょう？
一郎ちゃん　う・・うんまぁな・・・あはははは・・
野口　今日は一郎さんの夏用のスーツたくさん買いましたよ。

ねぇ華子さん。水玉模様のタイとか、チーフとか一流の店ばっかりで
楽しかったなぁ・・・それに、ぼくにまで夏用の傘を買ってもらいました。
一郎ちゃん　お前・・いや、君も買うてもらったんか・・・あはははは・・
華子　だって、ノンちゃん大きな荷物もって銀座を付き合ってくれたんですもの、
何かお礼しなきゃ。
野口　でももう、大丈夫ですね。明日からは快適にすごせますよ。
ね、一郎さん？

外でクラクションの音。

一郎ちゃん　何や？あの音…おい、お母ちゃんまさか・・
新吉　お父ちゃん！すごいで、フォードT型の車が来てるで！
お母ちゃん、あれ誰のん？
一郎ちゃん　・・・・・・・新吉・・・・・
新吉　え？
一郎ちゃん　うちのんや…
新吉　うわー…お母ちゃん…やった！フォードT型や！
華子　いいでしょう、ねぇ新ちゃん。ノンちゃんが免許持ってるから明日から
お買い物が楽よー。それにあなたも靴擦れなんかしなくて済むわよ。
一郎ちゃん　あはははは…ほんまやなぁ…お前は優しいわ…

一郎ちゃんは泣き笑い、他の者は大喜びで車を見に外へ出ていく。

第五場～事情

セットは同じ（？）だが、白河、堤、大蔵男爵、高瀬宮の
それぞれの屋敷内という設定。
４者の試験前の心中と日常が見え隠れする場。
白河が新聞記者の木原を相手に喋っている。

白河　そこで、私は思った。まだ３歳だったのだが、私のいう天才児は太陽を中心にこの宇宙があることを悟っていたのだね。

木原　なるほど。

白河　あの時、母は言ったものだ。「やっぱりこの子は稀人よ！ほかの子供にこんなこと分かりませんわ」と…

木原　お母さまもご聡明な方だったんですねぇ・・

白河　そこはちゃんと書いてくれ給えよ。母はプライドが高くてね。
アメリカ大統領の遠縁でもあるんだ。ははは…そう、これも（銃を見せる）
母のコネクションを使ってアメリカから取り寄せました。
ウィンチェスターのＭ１８７３という１１口径の連発銃です。

木原　確か１０歳の時でした。
１０歳といえば、私がニーチェを原書で読破した年です。
思えば私は１０歳にしてニヒリズムがなんたるか理解していたんですね。

白河　分かりました。白河さん…ところで、生い立ちは少しおいておくとして、
今回の試験のこともお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか？

木原　いいとも！試験、そのことが中心だからな、なんせこの試験に
優勝して、私が留学団のリーダーとして洋行するまでの
連載記事なんですから、そのことは詳しく聞いて下さい。

白河　ズバリ優勝するお気持ちでいらっしゃるんですよね？

木原　あなた、失礼な方ですね。お気持ちとはなんです、失敬な。（銃を向ける）
優勝するんですよ！私しかいないじゃないですか、私という天才しか。
今の大学の試験ごときでは私の熱い勉強道を満足させるような問題には
もうお目にかかれないんだ。
ただ留学団のメンバーに入るには私という天才は器が大きすぎるんです。
首席にならなくては、もう意味がないんですよ。
その私にこの機会が訪れるとは、神も見離さなかったのだ。
無差別に知識を試される快感、しかも公開試験という場で！
受けるしかないじゃないですか。そして乗り越えるしかないんです。
子供のころから学問の道にライバルらしいライバルのいなかった

この私に3人も強敵が出現したのだから。
木原　ものすごい自信ですね。
白河　仕方ないんだよ。これは自信ではなく事実なんですだから…
木原　ありがとうございました。今日はこのくらいにして、また明日お聞きします。
私も一旦社の方に戻るんで…
白河　では明朝9時にまた来てくれたまえ。
木原　はい、分かりました。
いやー実際、白河さんから独占記事のお話をいただいて助かりました。
今のところ、候補者の話は高瀬宮様からお聞きしただけですからね。
白河　高瀬宮様…ですか。
悪いですが今回の試験に身分は関係ないですよ。
たとえ皇族の方が参加なさろうと私が勝つことに変わりはありません！
木原　あ、それいただいてもいいですか？
白河　どうぞ！（ポーズをとる）
木原　いえ、あのお写真は同じものを使わせていただきますので、その
私が勝つことに変わりはないという、お言葉を見出しにいただけますか？
白河　いいですとも、何なら見出し用にいくつか名言を申し上げて
おきましょうか？「トンネルを抜けるとそこは試験場だった」
「問題を解くか、解かないか、それが問題だ」いかがです、今のは？
「来たれ若人、稀人の下に！」こういうのは？
木原　はぁ、ありがとうございます。（わざとらしく）あーしまった！
締切の時間だ。申し訳ないです白河さん！本日はこのへんで
本当にありがとうございました。明朝、伺いますんで…
（慌ただしい振りをして出ていきかける。）
白河　木原さん。今日は楽しかった、どうもありがとうございました。
木原　ああ、こちらこそ。
白河　あ、そうだ車で送らせよう。
木原　え、いいんですか？
白河　構いません、私も乗りますから。
木原　え？
白河　そうしたら新聞社に着くまで話が出来るから。ね、名案だろう？
木原　はぁ・・・ありがとうございます。（ちょっと泣きが入る）
白河　うちの車はものすごく遅いんです。
木原　ええ？
白河　さぁどうぞ、どうぞ。
木原は疲れつつ…2人退場。

タンゴ。ひと組みの男と男が踊り始める。堤洋一郎と
華子の従兄弟、野口である。

堤　まったく、明治という時代は行きすぎ始めてるよ。
政府も華族でさえ浮かれてる。高瀬宮さまをごらん、皇族のおひとりだと
いうのに毎日お忍びで銀座か横浜あたりを徘徊しているという噂だぜ。
社交界一のモボときた、冗談じゃないね、まったく。
野口　けれども、宮さまに勝つおつもりはないと？
堤　公開試験のことかい？ははは・・当然じゃないか。あんな茶番に
本気で付き合っていられるものか。宮もどうしてご参加なさったのか、
真意が分からんよ。
野口　モボの洒落っ気でしょう？
堤　それが行きすぎだっていうんだ。
野口　堤さんは本当に試合に負けるおつもりなんだ。
じゃあいったい、なんで参加したんです？
堤　大蔵男爵から要請があった時はちょっと新聞に顔を出して、
世間の注目を浴びる格好の企画だと思ったのさ。
まさか浅井や高瀬宮さまでが参加してくるとはね・・
堤　そう、ここでターンだ。どうだい？情熱的な踊りだろう？
野口　女はこっちですか？
堤　いや私が女だ。
野口　もの凄いな、こんないかがわしい踊り本当にあるんですか？
堤　ははは・・・ここだけの話ラテン系の女性はなかなか、いかがわしいよ、
特に夜はね。
野口　しかし、我が従妹どのも何を考えてあの男と駆け落ちなんぞ
しでかしたことやら。
堤　おかげで、浅井子爵の地位をすんでのところで継ぎそこなった君としては
気になるのかい？
野口　ハッキリ言いましたね。
堤　聞きたくなかったかい？
野口　まぁね。いいじゃないですか、ぼくは彼が嫌いなわけじゃ
ありませんよ。あなたほどは・・・
堤　ぼくは許せんね。あの男が華族の一員だなんて絶対に許せない。
あの下品な服の着こなしをみろ、あれで子爵だなんて許せるかい？
街でバッタリ会ったら彼に頭を下げろというのか？吐き気がするよ。
あの聡明な華子さんがあいつに拐かされて、連れていかれた時に

断固として連れ戻すべきだったんだ。
野口　堤さんまさか、華子さんへの恋慕ですか？
堤　バカな、私が女なんかに恋をするわけないじゃないか。まして年上だ！
野口　じゃ男に？

呆れた風情の堤男爵、野口をダンスの振りで遠のける。

堤　おいおい、からかわないでくれ給え。私が言ってるのは華族としてのプライドの問題だよ。確かに、華子さんとうちの叔父に縁談の話があったらしい。が、それも家柄が吊りあうからこそさ。恋だの、愛だのというのは西洋かぶれの戯言（ざれごと）だよ。そんなものは平民に言わせておけばいい。考えてみたまえ、君は遊びにいった先で芸者と深くなったからって家を捨てて結婚するかい？
野口　それはありえませんね。
堤　だろう！華子さんもそうするべきだった。あの学問を金儲けの道具にするような男が子爵の称号を継いでしまう前に断固として阻止するべきだったんだよ。でないと日本はどんどん下品になっていく一方だ。血を薄めるにもほどがあるよ。
野口　そんなに腹が立つならなんで試合に負けるおつもりなんです？
堤　一郎さんに勝って笑いとばしてやればいいじゃないですか？バカなことを言わないでくれ、宮さまが出てくるんだよ。私が勝って目立ったらどうする？そんな不粋なことが出来るもんか華族の物笑いの種になれっていうのかい？ここはすっきり我々は浅井に負けて、それを高瀬宮さまが制して下さるという筋書きが正しいのさ。それで新聞屋どもは喜ぶだろうし、何より国民は安心するだろう。
野口　「さすがは宮さま」そう言われなければならないんだ
堤　ふーん、堤さんが言うと、さも実現するようだから怖いなぁ。そういうわけでもないさ、私だって人間だから欠点もあるとも。
野口　へぇ・・何です？
堤　教えない。
野口　教えて下さいよ。
堤　（耳打）

在り得ないという表情の野口。

野口　ははは、そんなのは欠点とはいいませんよ。そういえば浅井の欠点をこの間知ったんですが、大笑いだったなぁ

堤　浅井の欠点？ほう、天才にも落とし穴か？

野口　それそれ、そんなこと言ったら失神してしまいますよ。

堤　え？

野口　落とし穴。ほら忌み言葉ですよ。学生とかが試験の時に縁起を担いで嫌うじゃないですか。「落ちる」とか「滑る」とか言わないでくれって、あれに弱くて笑ってしまったなぁ。

堤　ははは・・・バカな。

野口　本当なんですって！

堤　やれやれだな、聞いてられんよ。どうだい、2階でブランデーでも飲むかい？

野口　いいですね。

堤　友人がフランスからいいのを土産に持って帰って来たんだ。

野口　ご相伴たまわります。でも今の話は本当ですからね。

堤　分かった。そういうことにしておきましょう。

野口　ひどいなぁ、私まで子供扱いなんだから・・・

堤　ははは・・・

2人は2階へ上がって行く。

代わって、大蔵男爵と宮下が玄関から入ってくる。

外から帰ってきた様子。

大蔵男爵　宮下！宮下！

まったくどうしてあのメス犬を繋いどかんのだ。

莉奈　知りません。

大蔵男爵　なんだ、宮下はどうした？

莉奈　お父様がお使いに出されたんでしょ？

大蔵男爵　ああ、そうか。そうだった。

莉奈　宮下さんでないと頼めないのね。

大蔵男爵　（その話題にはわざと触れないで）

う～ん、まさか陛下に呼び出されるとは思わなかったなぁ。

何はともあれ飲み物だ。喉がカラカラだよ。

莉奈　はいはい。

大蔵男爵　宮中にいる間中、薬臭い部屋にいたので喉をやられたよ。

莉奈　陛下のご病状はよくないのでしょうか？
大蔵男爵　しっ…
大蔵男爵　滅多なことを言うな。
莉奈　ごめんなさい…
大蔵男爵　…いかんのだろうなぁ。
莉奈　明治はどうなるのですか？
大蔵男爵　皇太子様が立派に次の世を統治なされる。我々もお傍におるのだ、
心配することではない・・・しかし、国民は悲しみにくれるだろう。
莉奈　近代日本にとって陛下は特別なお方だからなぁ・・・
大蔵男爵　今回の留学団も実行不可能になるということ？
そんなことはない、自由な時代を築いた日本の象徴たる洋行だ。
莉奈　中止にすることはないさ。
大蔵男爵　お父様はお好きなのね、この時代が。
好きさ。考えてもみろ、私が子供の頃はまだみんな丁髷（ちょんまげ）を
結っていたんだぞ。私の祖父もだ。父だってそうだった。
母親はお歯黒をしていたよ。美しい人だったのに、あれじゃあ台無しだ。
１０歳ぐらいまでは世の中がどうなるのか分からなかったんだ。
それがみるみる変わったよ。勉強をすれば外国人と話も出来るようになり、
江戸から百里と出ずに死んだ私の父が想像も出来なかった世の中になり、
そこを息子の私が闊歩している。愉快じゃないか！やれ、路面電車が家の
前までできた。車を買った。ガスを引いた。あそこの医者が洋行した。
こんな時代が我が国にくるなんて、５０年前に誰が想像したんだ。
今こそ日本は身分を問わず、自由に才能を生かせる楽天地に生まれ変わった
んだ。２度と江戸時代に戻ってなるものか！
莉奈　ふふふ・・それは極端よ。じゃあお父様は今回の公開試験に
たとえ宮さまがご参加なさっても、あくまでも公明正大に
行なわれるお覚悟なのね？
大蔵男爵　当たり前だ。宮もおっしゃっていた、例え最下位になろうとも日本で
４番目に頭のいい男なら良いではなかとなぁ。
莉奈　陛下もそれを聞いてご満足そうだった。お前にも話たろう？
ええ「高瀬宮に公明正大なる機会を与えてくれて感謝する」と
おっしゃられたって。お話してくださいましたわ。
陛下の広いお心には感激したって。
大蔵男爵　そうだった。
莉奈　お父様、本当に嬉しいんですのね。
大蔵男爵　当たり前だ！・・・というか実のところ宮さまのご参加を

どうとらえるべきか迷っていたのだが、陛下にお会いして実に
爽快なお答えをいただいたので安心したよ。
宮下、例え宮さまであろうとも試験はみなと一緒に受けていただく
それが正しい姿なんだ。

莉奈　公明正大な方だわ。

大蔵男爵　だからこそだ。陛下のお加減が少しでも良くなられるように祈るだけだ。
お見せしたいからな・・この日本で行なわれる知識人の集大成を競う姿を！
これこそが陛下の望まれた近代の日本人の姿なんだ。
文武に秀でたる民族である証明ではないか！（ちょっと興奮気味）

莉奈　まったくですわ、ところで何かお飲みになるというのは・・・

大蔵男爵　おお、そうだった。喉が乾いたと言っていたんだったな。
気が効かないぞ莉奈、何か持ってこい。

莉奈　ごめんなさい。

大蔵男爵　いや、いい待ちきれない、私がとってくる。（自分で台所へ）

莉奈　いやだわお父様。私が致します。台所にお入りになるなんて。

大蔵男爵　いいから、いいから・・

2人は台所へ。
2階から高瀬宮と宮下が下りてくる。
どこかの館、どこかのサロンである。

高瀬宮　もう一度歌ってくれ。

宮下　（戸惑いながら）はい。宮さん♪お馬の前でひらひらするものなんじゃいな。
トコトンヤレトンヤレトンヤレナ…

高瀬宮　平民がそんな歌をっていたなんて…面白いなぁ。

高瀬宮は満足そうにソファに座る。

宮下　高瀬宮さま。それではそろそろ私は…

高瀬宮　もう帰るのか？まだいいじゃないか、わざわざ陛下のことで、私にも
見舞いを言いに来てくれたんだろう？

宮下　は…男爵の言いつけですので。
それに、宮さまがあの日以来ふさいでおられるとお聞きしてまして。

高瀬宮　あの日？留学団のリーダーを決める試験を受けると言い出した日か？

宮下　はい。あの日以来、宮さまは少しふさぎがちだとお聞きして、
皆が大層心配しております。

高瀬宮　そうかな…
宮下　まさか、後悔をなさっているのでは？
高瀬宮　…同級生のよしみで告白しようか？
宮下　はい。是非！
高瀬宮　…やっぱり止めておく。君に言うと大蔵に筒抜けだからな。
宮下　高瀬宮さま。

高瀬宮は面白そうに宮下を見る。

高瀬宮　もう一度、歌ってくれ。
宮下　（戸惑っている）
高瀬宮　いや、嘘だ。歌はもういい。歌わなくてもいい。
莉奈　・・・
高瀬宮　すまない。
宮下　どうして試験なんかお受けになるのですか？
高瀬宮　洋行なさりたければ、お好きな時に行かれれば・・・
宮下　お役に立ちたかったんだ。
高瀬宮　は？
私は生きてても役に立たないからさ。大学に入っても良かったし
君の言うように洋行しても良かった。反対にアホウでも良かったんだ。
何事もなく無事に人生を送ってればいいんだよ。
このままじゃあ、私は道端のゴミと同じだよ。
宮下　ひどいことおっしゃいます。ご自分がかわいそうですよ。
高瀬宮　だからさ。だからこの試験を受けるんじゃないか。自分の力で
国のためになる仕事を見付けたいんだ…
平民に生まれたかった…何か役にたつ人間に…
裸になって、一から始めたいんだ。
宮下　裸になって？
高瀬宮　それが男子たるものの生き方じゃないか。
あの浅井という男をごらん、私は羨ましくて仕方がない。
同じ知識を得るのにも苦労できるなんて！彼は貧民なんだよ。
裸一貫からはい上がってきたんだ。私にははい上がる所なんかないんだ！
宮下　宮さま…
高瀬宮　負けたくない。浅井に負けたら私はまたゴミに戻るんだ。
陛下の子供の中で私ほど優秀な者はいないというのに、あの偉大な方の
お役にも立てずこうしてフラフラと生きていくのはもう嫌だ！

今度こそ陛下にも、国民にも認められた
役に立つ人間に生まれ変わりたいんだ。（泣く）
宮下　宮さま、泣かないで下さいませ。…泣かないで、
いつもみたいに親指チュパチュパなさればいかがですか？
高瀬宮　……する。
宮下　どうぞ、見張っておりますので。
高瀬宮　お母さま…（ソファに寝転がって自分の指をチュパチュパ吸う）
宮下　お可哀相に…親の愛をご存知ないから・・・
高瀬宮　そんなことない、お母さまはずっと私を愛して下さった。
だが、高貴なお生れの方だったから…甘やかしてくださらなかった。
宮下　お察しいたします。
高瀬宮　長屋に生まれたかった。浅草あたりの賑やかな長屋に…
浅井はなめくじ長屋というところで生まれたそうだ。
宮下　・・・・・・・
高瀬宮　人形町の平屋でも良かった…
宮下　・・・・・・・
高瀬宮　亀井戸の職人の子でも良かった…
宮下　・・・・・・・
高瀬宮　……
宮下　下町の名前、それ以上ご存じないんですか？
高瀬宮　私に庶民的な知識がないと思っているのだな・・（泣く）
宮下　とんでもございません。私の言葉足らずです。
（咳払い）教えいたしますので。
浅草…錦糸町…両国…神田…神谷町…

高瀬宮はうっとりと聞いている。　暗転。

第六場～刺客

浅井家の朝。バタバタと用意をしている新吉。
着せ替え人形のように華子に派手な燕尾服を着せられてる一郎。
華子や新吉も正装してるところから公開試験の日であることが分かる。

新吉　なぁ…お父ちゃん、ネクタイの結び方書いた紙知らん？
一郎ちゃん　おう？
新吉　この間書いてもうろてんけどなぁ…どこ行ったんやろう。
一郎ちゃん　新吉、お前なんちゅう格好してんねん。
新吉　なんちゅう格好って、フッ・・・自分の格好あとで見た方がええで。
一郎ちゃん　何や「フッ」って言うのは！イタタ・・・お母ちゃん、ネクタイ絞めすぎやで、死んでまうがな。
華子　あら、ごめんなさい。でもあなたよく似合うわよー。良かった三越にしておいて、別誂えよこれ。

一郎ちゃんはこの世のものとも思えぬ派手な燕尾服で宝塚スターのようにキラキラしている。

一郎ちゃん　ほんまかいな。まぁセンスのええお母ちゃんの言うことやから信用してるけど・・・センスええかなぁ。
新吉　なんや新吉、お前、親に向かって何ちゅうこと言うとんねん。お母ちゃんに謝れ。
一郎ちゃん　ごめんなさい。
新吉　よっしゃ。
一郎ちゃん　でも、お父ちゃんも今「なんちゅう格好してんねん」って言うてたやんか。
新吉　わしはセンス悪いから分からんのや、こういうもんは。
一郎ちゃん　

誰か表にやって来た様子、呼び鈴が鳴る。

一郎ちゃん　誰やこの忙しい時に？
華子　写真屋さんを呼んであったのよ。新ちゃん、お通ししてきて。
新吉　うん。
一郎ちゃん　写真屋？
華子　だってせっかく新吉とあなたが揃って素敵な格好してるんですもの、

こんなことお正月でもないでしょう。だから今のうちに写真に
撮っておいてもらおうと思って。
一郎ちゃん　ふーん。
華子　あなたは興味がなくても新吉が可愛いのはあと何年かだけなのよ。
ちゃんと残しておいてやらないと！
一郎ちゃん　そんなもんかなぁ

新吉が玄関口に出ると確かに写真屋が立っていて、新吉が招き入れる。
若い男がカメラや鞄を抱えて入ってくる。

写真屋　お早ようございます、旦那さま、奥様。新橋の岡村写真館から参りました。
華子　お待ちしてましたわ。時間がないの、さっそくで悪いんだけれど
主人の写真と家族写真をお願いできます？
写真屋　都合で2枚ですね、ようございますよ。奥様も綺麗なお洋服なの
ですから1枚お撮りになっておけばよろしいのに・・・
華子　あら、そうかしら？
新吉　お母ちゃん、時間ないで。
華子　嫌ね、新ちゃん、あなたって本当に父親似なんだから。
女心が分かってないわよ。
新吉　分かってたまるか、まだ10歳やちゅーねん！
一郎ちゃん　何でもええから、チャッチャとせえよ。
写真屋　はいはい、かしこまりました。それではまず旦那様のお写真から
お撮りいたしますので。この椅子にこう・・・はいはい、そうです。
で、お顔をこちらの方に、ええ。
新吉　あははは・・・何か変やでお父ちゃん。
一郎ちゃん　やかましい、お前もするねんぞ。
新吉　ゲロゲローッ。
写真屋　奥様、申し訳ございませんが、旦那様のお帽子があれば、
もっと格好が良いんで、持ってきていただけませんか？
華子　帽子、あるわよ、あるわよ、何でもあるわ。でもこれはシルクハットよね。
ちょっと待ってて下さる、出してくるわ。

華子は嬉しそうに2階へ駆け上がっていく。

一郎ちゃん　おいおい、お母ちゃん、いつのまにシルクハットまで買うとったんや？
ほんまに油断もスキもないで

写真屋　ああ、旦那様、動かないで下さいまし。
一郎ちゃん　え？ああ、しょうないなぁもう、写真ちゅうのは・・・
写真屋　申し訳ございませんねぇ・・

一瞬のスキに写真屋が小刀のようなものを出して一郎ちゃんを襲う。
右肩から手のひらにかけて何ヵ所か切られる。

一郎ちゃん　わぁ…くっ…何するんじゃい！
新吉　お父ちゃん！
一郎ちゃん　どいてろ、新吉！

一郎ちゃん、写真屋と格闘。華子が２階から下りてきて叫ぶ。

華子　きゃああ、あなた！
一郎ちゃん　下りてくるなっ！（一郎ちゃんは上着を脱いで腕に巻き付け押さえながら写真屋に蹴りを入れる）
写真屋　こいつ、どういうつもりやっ！
一郎ちゃん　悪いな、命は獲らないから安心しろ。
写真屋　何？
一郎ちゃん　腕だけだ、成り上がる奴は煙たがられるのさ。
一郎ちゃん　どういう意味や…ううっ

写真屋を装った賊は何も言わずに堂々と玄関から走って出ていく。

新吉　待て！
一郎ちゃん　新吉、追うな。
新吉　だって、お父ちゃん。
一郎ちゃん　ええから…イテテ…くっそう…（一郎ちゃんは前のめり込む。どうやら怪我は深手の様子。華子も２階から下りてきて心配そう。）
華子　あなた！大丈夫？まぁ・・・ひどいわ・・この服高かったのに・・
一郎ちゃん　おいおい、頼むわ・・
新吉　お父ちゃん！
一郎ちゃん　新吉、医者呼んでくれっ。止血だけしてもらわんと、行かれへん。
新吉　分かった。

そこに野口が入ってくる。

野口　お早ようございます。お迎えに上がりましたよぉ。
あれ・・どうしたんです？
華子　ちょうど良かった。ノンちゃん、車で病院まで行ってちょうだい。
野口　どうしたんです、一郎さん？
一郎ちゃん　何か分からんけど、賊に切られたんや。
野口　どれどれ、こりゃあひどいな・・・すぐ病院に行きましょう。
一郎ちゃん　そんな暇あるかいっ、着替えるからその間に医者連れてこいっ。
血ぃさえ止まったらええからっ。
野口　そんな、一郎さん。腕が使えなくなりますよ。
一郎ちゃん　アホぬかせ、もう行かな時間がないんや！はよ呼んでこいっ。
野口　仕方ないなぁ…新ちゃん、お酒！
新吉　分かった。
一郎ちゃん　脱いで下さい。ぼくが止血しますから。
一郎ちゃん　お前が？
野口　ぼくだって帝大医学部の端くれですから、止血ぐらいならなんとかしますよ。
一郎ちゃん　何やと？おのれが帝大医学部？
野口　ただの遊び人だと思ってました？一応華族の端くれなんで、
面目は果たさないと勘当になりますんでね。
一郎ちゃん　これやで、お華族さんのぼんぼんはアホに見えてもやっぱり質がええ
ちゅーのは・・・
野口　アホ、アホって、止血しませんよ。
一郎ちゃん　痛っ…優しいぃせえよ！お母ちゃん、紋付出してきてくれ。
やっぱり着物きて行く。あれ着んと腹が落ち着かんわ。
昔のんでええから出してこい。
華子　はい、あなた。（2階へ飛んでいく）
野口　でも参加者は全員正装着用のことと招待状に書いてありましたよ。
一郎ちゃん　紋付こそが日本人の正装やないかいっ。
新吉　お父ちゃん、ほんなら足袋と草履やな。
一郎ちゃん　おう新吉、足袋はええ、もう履いてる。靴脱がせてくれ。
新吉　また？靴の中ゴワゴワせぇへんの？
一郎ちゃん　今、気が着いたんやっ。イタタ…荒っぽいなぁ野口！
このヤブ医者がっ。
野口　一郎さん、思ったりキズは深いですよ。これじゃあ試験の時に
鉛筆なんか持てないんじゃないかな・・
一郎ちゃん　何？…待てよ、そういうことかっ。

新吉　何が？
一郎ちゃん　あの写真屋、命は獲らへん、腕だけやって言うてたな・・・
右手がこの調子やったら確かに答案なんか書かれへん、
試験をやめるか、やっても人より書くのが遅うなる・・・
要するに負けるっちゅーことやわなぁ。
野口　まさか、誰か他の受験者が妨害をはかったっていうんですか？
一郎ちゃん　そのまさかやろ…
野口　誰が？
一郎ちゃん　知るかっ、そんなことに興味ないわいっ。
新吉　でもお父ちゃん、この手ぇやったら字書かれへんで、どうするの？
一郎ちゃん　はははは心配するな。刺客もうかつやったなぁ、
わしが左手でも字書けるのん知らんかったようやな！
新吉　左手でも書ける？お父ちゃん左ききなん？
一郎ちゃん　いいや。そやけど昔、参考書作ってる時に問題を書く時間がもったいない
から左でも書けるように訓練したんや。両方で書けたら時間も半分になって、
参考書も早う作れるやろ。つまり・・
新吉　早よ儲かる！
一郎ちゃん　はははは…新吉、お前もやっとお父ちゃんのテーマを飲み込んだようやな。
新吉　うん、まあな。

華子が２階から着物を持って下りてくる。

華子　あなた、これ。
一郎ちゃん　おう。何や…新しい着物やないか、どうしたんやこれ？
華子　作っておいたのよ、絶対着るって言い出すと思って。
一郎ちゃん　お母ちゃん…
華子　あなたらしいものも作っておかないと、叱られるでしょ？
仕付け取って、気分も新たに行きましょうね、あなた。
新吉　やるやん…お母ちゃん。
華子　うふふ。
野口　良かったですね、一郎さん。
一郎ちゃん　また作ったんか！古いのでええんや。
紋付なんかそれこそ１０枚も２０枚もあるやろう！
華子　だってぇ…
一郎ちゃん　だってやないで、こんな時のためにとか何とか言うていつも新しいのん
作っとるがな！

華子　新しいもの好きなんですものぉ。
新吉　やれやれ、お父ちゃんとお母ちゃんの人生のテーマは合うことないんちゃう？
一郎ちゃん　やかましい。２人とも笑うてんと、着替え手伝うてくれ。腕が使われへんから帯が結ばれへんわ。痛っ…くっそう…野口、けっこう痛いで…
野口　痛み止めを飲んでおいた方がいいですよ、一郎さん。
一郎ちゃん　アホ、眠気のくるもんは飲まんぞ、試験やねんから！
野口　でも我慢出来ますか？
一郎ちゃん　ゴチャゴチャ言うな。着替えさせろっ。
野口　頑固ですね。
一郎ちゃん　分かっとるわ、そんなこと。
野口　じゃあ奥に行きましょう。立てますか？脇に力を入れるとあんまり響きませんからね。
一郎ちゃん　医者の卵っちゅうのは嘘やなさそうやな。
新吉　お父ちゃん、汗すごいで・・・
一郎ちゃん　面白うなってきたのぉ新吉。
新吉　え？
一郎ちゃん　このまま主役のわしがハンデもなく、すんなりいかへんとこが、神さんも味なことやりはるっちゅー感じやないかい。
新吉　お父ちゃん・・
一郎ちゃん　何じゃい？
新吉　…ううん。今日は格好ええわ、やっぱり。
一郎ちゃん　いつも格好ええわいっ。

野口と華子にささえられるようにして一郎ちゃんは奥に。
新吉が散らかった物を持って付いていく。

第七場～試験

木原が電話室から会社に報告中。きちんとした燕尾服を着ている。

木原　はい、今から始まります。ええ、もう会場です。
いや、このまま大蔵男爵とずっとご一緒することになると思います。
いいえ、陛下はいらっしゃらないようです。
やはり、お体の大事をとられてということでした。
ええ、皇室側は隠してますが、大蔵男爵の言葉から察すると
だいぶお悪いようですね。分かりました、また電話しますよ。

やはり式服に着替えてる大蔵男爵、宮下が2階から下りて来る。

宮下　木原君、そろそろ開場の時間だよ。閣下が最初にご挨拶に立たれるから
君も我々と一緒に後にいるといい。
木原　はい、宮下さん。今日は一段とご立派ですね。
宮下　君も立派な燕尾だね。誂えたのかい？
木原　こんな立派な催しに着てくるものなんて持っていませんからねぇ。
デスクに掛け合って半分出してもらいましたよ。
宮下　ほう、じゃ半分は会社のものかい？辞める時には返さなきゃいかんな。
木原　その時にはズボンだけ返します。燕尾服は上の方が重要なんで。
宮下　まったくだ。ははははは・・
木原　高瀬宮様もいらっしゃってるんですか？
宮下　宮様は早くからいらしてるよ。浅井子爵がまだなんだ。
木原　浅井子爵が？どうしたんでしょう…
宮下　分からん。もう少し待ってみてるが、今電話を入れさせてるところだ。
時間を守るのも紳士の基準だからね・・・
今回のリーダーを選出するのには心身に優れた者が選ばれるのだから、
彼が遅れてきて試験の点数だけよくても困るんだが…
木原　そんなもんですかね。
宮下　それそれ、そこが紳士のルールを履き違えて…
大久保　宮下秘書官、浅井家に電話を入れましたが、誰もおりません。
宮下　そうか、分かったご苦労だった。
木原　もう開場時間ですよ。
宮下　困ったことになった閣下にご報告せねばなるまいな。
木原君、一緒に来るかい？

木原　　もちろん、お供しますよ。

２人、２階へ上がっていく。
荘厳な音楽が流れ、人のざわめきと拍手が聞こえる。
２人の先導する衛兵が階段から下りてくる。後に大蔵男爵。
宮下と木原は２階の端の方に控える形で立っている。

宮下　　ただいまより、第一回文部省公認、英国留学団首席者任命のための公開試験をとり行ないます。

大きな拍手。

宮下　　公開試験に先駆けまして、任命理事長、大蔵建造男爵からお言葉がございます。

大きな拍手。

大蔵男爵　　本日はこの記念すべき公開試験のために、かくも賑々しくご列席賜りまして感謝したしております。
明治半世紀もまじかに迫った今、国を父となし、
その加護を受けたる子供達が世界へ羽撃こうとしております。
この記念すべき大留学団の首席者は文字通り、この国の未来を担う若者の代表者でなくてはなりません。
本日、その候補として集まった４人の若者の中から、公明正大なる選出をなし、心技体ともに健康で優秀な者が首席者の地位に着くよう、心から支援するものであります。
未来は！日本の若者の手の中のあるのです！

大きな拍手。大蔵男爵はちょっと興奮気味。

宮下　　首席候補、受験者の入場。白川稀人様。

白河の登場。拍手がおこる。
白河は誰にも聞こえないのに自分の名前の由来を話してる様子。

宮下　　堤洋一郎男爵様。

堤が続いて登場、同じように拍手がおきる。
堤は大人らしく軽く会釈して白河に並ぶ。

宮下　　高瀬宮様。

高瀬宮が登場。大きな拍手がおきる。
皇族らしく会場の観客席に優雅に手を振る。

宮下　　浅井一郎子爵様。

拍手がおきるが一郎ちゃんの姿がない。観客はどよめき始める。
他の候補者３人もちょっと困った感じ。

大久保　　閣下、やはり連絡はつきません。
大蔵男爵　　うーん…
高瀬宮　　大蔵男爵、どうしました？
大蔵男爵　　ははっ、申し訳ございません。

大蔵男爵と宮下が小声で話しをした後、宮下が仕切り直して
話し始める。

宮下　　皆様、ご静粛に願います。ただいま呼び出した浅井一郎子爵ですが、
本日急病のため、残念ながら欠席ということになりました。

大きなざわめき。

宮下　　ご静粛に。浅井子爵がいらっしゃらないので、３人の方で
公開試験を争うことになります。予定通りに始めますので、
どうかご静粛に願います。
一郎ちゃん　ご心配なく。４人目はここに参上しております。

その声とともに一郎ちゃん登場。野口が肩を貸している。歩くのが辛そう
だが、表情には出さない。新吉が後から着いて来る。

宮下　　浅井子爵！・・・そのお姿は？

一郎ちゃん　なにか？招待状に正装と書かれていましたので日本男児の正装で
参上したまでです。
宮下　いや、それはそうですが・・・

会場から中傷の笑い声が少し聞こえてくる。

野口　宮下秘書官、私の従兄弟が遅刻を致しましたのには原因があるのです。
怪我をしておりまして。
一郎ちゃん　野口！余計なこと言うな。
宮下　怪我？浅井子爵、大丈夫ですか？公開試験をお受けになられますか？
一郎ちゃん　大丈夫ですとも。
宮下　ひどい顔色だ、お止めになった方がいいんじゃありませんか？
新吉　父は大丈夫です。
宮下　君は？
新吉　みなさん、すいませんでした。父の遅刻はけっして故意的なもの
ではありませんので、どうぞ試験に参加させてやって下さい。

会場が静まり返る。
高瀬宮がすかさず声をかけてくる。

高瀬宮　浅井子爵、お持ちしてましたよ。
大蔵男爵　宮下（目配せ）
宮下　皆さま、浅井子爵が到着致しましたので、予定どうり四名で公開試験を
執り行なう事に決定致します！

高瀬宮に乗じて浅井を取り込む大蔵男爵。
宮下が合図をすると、ファンファーレが鳴り、会場からもパラパラとした
拍手が起き始め、やがて大きなものに変る。
野口と新吉は気にしながらも宮下と共に大蔵男爵の方へ。

男１　試験は７科目。１科目に１０問の出題がなされております。
時間制限の中で回答をお書き下さい。
持ち物は万年筆、及びご自分のご愛用の筆記具だけに限らさせて
いただきます。僭越ではございますが、お体を改めさせて
いただいてよろしゅうございますか？
堤　心外ですな。

高瀬宮　どうぞ、お調べ下さい。
堤　宮様…
高瀬宮　規則には従いましょう。
堤　は…浅井子爵、怪我は本当に大丈夫なんだろうね？
宮様もおられるんだ。途中で放棄なんてみっともないことはしない方が浅井家のためだよ。
一郎ちゃん　よく怪我だとお解りですね、堤男爵。
堤　ええ…支えていらっしゃるので…それともご病気ですかな。
野口　堤さん…あなた、まさか？
堤　なんです？
一郎ちゃん　堤男爵、ご心配ありがとうございます。
野口、もうええから、行け。
野口　一郎さん…（心配しつつ大衆の方へ）

試験官が各自の体を調べて、何もないことを観客にアピール。
拍手がおきる。

宮下　では、答案用紙をお渡しいたします。

答案用紙が配られる。
試験官の合図でドラが鳴る。会場がまた少し騒めく。

野口　申し訳ございません、閣下。
大蔵男爵　いったいどうしたのだね？野口君。
野口　あ、この子は浅井子爵の長男です
新吉　初めまして閣下。浅井新吉と申します。
大蔵男爵　初めまして。（華族らしく握手）
野口　実は今朝、ここに向かう前に子爵が自宅で賊に襲われまして。
宮下　賊に？
野口　はい。右腕に3ケ所怪我をおっております。
大蔵男爵　大丈夫なのかね？
野口　本人は左手でも答案が書けると申しまして…
宮下　左ききか、珍しいな。
野口　いいえ、左手でも書けるという特技があるそうでございます。
大蔵男爵　ほう、変わった特技だな。
新吉　儲けるために覚えたんです。

野口　新ちゃん、ここはぼくが説明するから君は黙ってなさい。

試験が始まる。

宮下　それでは、ただ今より試験を開始いたします。

合図とともに銅鑼が鳴る。

宮下　で、回答は書けるとして、子爵の怪我の具合は？

野口　肘の上の裂傷がかなり深手です。神経に達してる可能性がありますので、一刻も早く適切な治療をほどこした方がいいかと…

宮下　痛みはあるんですか？

野口　薬を拒否しましたので止血しかしてません。おそらく激しい痛みがあると思いますが…

大蔵男爵　まるで怪物だな・・・

もの凄い拍手。

宮下　閣下、あ、浅井子爵がもう問題を全て解いてしまったようです。

大蔵男爵　何？しかし、まだ…（懐中時計を見る）

新吉　高瀬宮様もや。

大蔵男爵　おお、さすがは日本一を競う公開試験だな。

宮下　バカな、あの問題はいずれも帝大、京大の教授達が選りすぐった難問揃いですよ。こんな短時間では…

野口　堤男爵も、白河稀人君も終わったようだ。

宮下　す・・すごい・・・

大蔵男爵　我々の頭脳を遥かに越えた知識人だったということだよ宮下。

宮下　しかし、そんな…同じ人間ですのに…

大蔵男爵　彼らはもはや人間ではないのだ。超人だよ、超人。

野口　すごいね新ちゃん、一郎さん、ほんとに左手でスラスラ書いちゃったよ。

新吉　当たり前やん。うちのお父ちゃん、やる時はやるちゅうねん！

試験官達が答案用紙を集める。

宮下が採点結果を受け取る。それぞれの点数が発表されていく。

宮下　それでは採点結果を発表させていただきます。

高瀬宮様、７教科とも満点の７００点。
大きな拍手。

宮下　白河稀人様、７教科とも満点の７００点。
大きな拍手。

宮下　堤洋一郎男爵様、６９９点。
大きなどよめき。

男１　浅井一郎子爵様、７教科とも満点の７００点。
大きな拍手

宮下　ただ今試験の結果、４人中３人が７００点満点となりましたので、
このままでは首席が決定いたしません。
よって、ただ今より協議を行いたいと存じますので、結果が出るまでの間、
たいへんお暑い中申し訳ございませんが、休憩をとらせていただきます。

大蔵男爵を始めとする面々が奥へ。
新吉が一郎ちゃんに駆け寄る。

新吉　やったーお父ちゃん！すごい。
一郎ちゃん　当たり前やないか、新吉。お父ちゃんが一番字書くの早かったやろ。
左手でもこんなもんや。
新吉　ほんまや、金儲けの信念は凄いなぁ
野口　一郎さん、今だけでも腕をそっと上に上げていて下さい。楽ですから。
一郎ちゃん　う・・・ほんまに医者になるつもりなんか？
野口　まぁ外科医になるつもりなんで、洋服を縫うのとあんまり
変わりませんよ…きっと。
一郎ちゃん　ますます洋服が嫌いになりそうや。（辛そう）

ざわめきと拍手が入り交じる中、４人が退場していく。
木原は混雑する人の声の中、新聞社に電話する。

木原

あ、デスク、今、終わりました。というより一部の終了って感じですけど。
ええ、まだあるんです。
４人中３人までが７００点満点でした。本当ですよ。
落ちたのは堤男爵ですが、それも６９９点の１点差でした。
いやー驚きましたよ。やはりみんな並みの天才じゃありませんね。
いいえ、一時間後に再開します。宮下秘書官が口頭試験とか
発表しましたが、急遽帝大の教授連中でも連れてくるんじゃ
ないんですかねぇ？
え？何ですって……天皇陛下がご危篤！…そんな…

暗転。

第八場〜中断

控え室。セミの声が遠くで聞こえ、ソファに一郎ちゃんがもたれるように座ってる。
野口が治療中。新吉は血のついた包帯を片付けている。
傍らに堤が立っているが、冷静な感じ。

一郎ちゃん　痛っ・・・(低く唸る)
野口　腫れてきたな。一郎さん・・どうします？本当に薬は飲まないんですか？熱が出てきたんで飲んだ方がいいですよ。
一郎ちゃん　いらん・・・
野口　じゃあせめて、この薬だけでも注射させて下さい？
一郎ちゃん　なんや？お前がするんか？
野口　化膿止めです。帝大から届けてもらいました。
大丈夫、眠くはなりませんから。
一郎ちゃん　殺さんといてくれよ。
堤　すざまじいですね。そんなに勝ちたいとは感服しますよ。
後半の試合を続行するかどうか、早く報せにきたらいいですなぁ。
ひょっとしたら痛み止めも打てるかもしれない。
一郎ちゃん　どういうことや？
新吉　天皇陛下のお具合がだいぶお悪いんやて…
一郎ちゃん　陛下が？
新吉　そやから、この試験も日延べするかもしれんって・・・
一郎ちゃん　そうか・・・
堤　この試験というより、高瀬宮様がいらっしゃるので続行は無理だと思いますよ。すぐにもお行きになりたいでしょうし・・・
一郎ちゃん　親の死に目か…そら、しゃあないわな。
野口　シーッ。一郎さん、滅多なこと言うもんじゃないですよ。
高瀬宮様は陛下のお子さまじゃないことになってるんですから。
一郎ちゃん　どっちでもええっ、わしは興味ないわ。
堤　華族の端くれなら興味があるないの問題じゃありません、
お守りする立場なんですから。
それに高瀬宮様は陛下の聡明なお血を濃く引いていらっしゃる。
陛下のご病状が悪化しているという今、心中をお察ししてさしあげるべきだ。
あの方はずっと陛下に愛されたくても、公然と申し上げられない
お立場だったんですから。
今回のこの公開試験に名乗りをお上げになったのも、リーダーになれば

陛下がお喜びになると思ってご参加なさったに違いありませんよ。
もっとも、あなたは最近社交界にいらっしゃったから、
そのへんの事情がお分りにはならないでしょうが。

野口　堤男爵、怪我人なのであまり話かけないで下さいますか。

堤　ああ、失敬。高瀬宮様のご事情を考えると、ついね…

野口　つい、一郎さんが高瀬宮様にご同情して、口頭試験の時に手を
緩めるとでもお思いだったんですか？

堤　何ですって？

野口　汚いインサイドワークだ。相手の家庭の事情を敵方に教えて
泣き落としなんて。

新吉　ノンちゃんお兄ちゃん・・

野口　あなたでしょう？写真屋に一郎さんを襲わせたのは！

堤　何だって？

野口　あなたは高瀬宮様が勝つべきだと言っていらっしゃった。
さっきの試験も解っていてわざと1点だけ負けたんだ。
一郎さんを襲わせて弱らせるのも作戦のうちだったんじゃないんですか？

一郎ちゃん　野口！……ええ加減にせぇ。（立ち上がって側に来る）

野口　一郎さん？

一郎ちゃん　堤男爵、身内の者が失礼なことを申しました。
私の怪我で興奮しているのは彼のようです。

堤　いいえ、私も自分の心に覚えのないことですので、一向にかまいませんとも。
それに高瀬宮様がお勝ちになった方がいいというのは
臣下として当然の思いです。別に隠し立てしていたわけではありません。
もちろん、お怪我のことは心からお見舞い申し上げます。

一郎ちゃん　お気持ちは伝わってますので、どうかご安心を。

堤　それでは、高瀬宮様のお部屋にもお見舞いを申し上げに
参りますので、失礼いたします。

一郎ちゃん　ありがとうございました。

堤はそ知らぬ顔で2階へ上がって行く。
みんなその姿を見送って黙ったままになってしまう。

新吉　あの、堤男爵がやったんかなぁ・・（父の腕を見る）

一郎ちゃん　そんなことどっちゃでもええ。本人が知らん言うてんねんから。

新吉　でも・・・

一郎ちゃん　今ある情況で目一杯やるんや。右手があかんかったら左手。

体があかんかったら知恵使うたらええんじゃい。
男がちょっと立場悪なったぐらいでゴチャゴチャ言うな。
みっともないで！だいたい、お前ら、人の怪我見てピーピー言いやがって、
わしを誰やと思うとんねん！わしゃ、浅井一郎やでっ。
全然、道理におうてへんけど迫力負けって感じやわ。

新吉　本当だねぇ。
野口　痛たぁ・・・
一郎ちゃん　ほらほら、大声出すからですよ。
野口　お母ちゃんも呼ぼうか？
新吉　あかん、お母ちゃんは今わしの代わりに仕事中やからええんや。
一郎ちゃん　仕事中？
野口　客席でこの試験の賭け組んで走り回ってるはずやで。
一郎ちゃん　賭け？なんて不謹慎な。文部省公認の国家試験ですよ。
野口　アホ。客は見てるだけやったら面白ないでぇこんなもん。
一郎ちゃん　ほんでなんぼ儲かるの？
新吉　新ちゃんまで・・・
野口　お母ちゃんの演技力次第やが、まぁ華族議員とかも客席におる言うから
一郎ちゃん　3万は下らんやろうなぁ・・・
2人　3万円！
新吉　お母ちゃんの演技ってそんなに上手いんかぁ。
一郎ちゃん　ちゃうがな、わしの評判落として回らせてるんやがな。
新吉　なんで？
一郎ちゃん　商売人の子とは思われへんなぁお前は。評判落ちたら賭け率が
高うなるやんけ。ほんなら、わしに賭けとんのはお母ちゃんだけ
ちゅうことになるやろう？あとはみんな高瀬宮じゃい。
あの堤みたいな奴ばっかりやからなぁ客席は。
どうせわしのこと田舎の猿やと思てるんや。ここはひとつガッポリ
儲けさせてもらうでぇ。
新吉　やったーお父ちゃん、やっぱり腹黒いなぁ。
野口　あはは・・・一郎さんには誰も叶わないなぁ・・
一郎ちゃん　そやから、言うとるやろう。わしを誰やと・・・

その時、2階から大蔵男爵、宮下、木原、白河、堤らが下りてくる。

野口　閣下・・・
宮下　やぁ、お待たせしました。浅井子爵、試験を続行することに決定しました。

一郎ちゃん　そうですか。
大蔵男爵　高瀬宮様のたってのご希望でね、続行することにしたよ。
野口　宮様の？
大蔵男爵　もちろん、陛下のご病気の事もお知らせしたのだが、
それならなおさらこの試験に望んで国家のお役に立っている自分を
陛下にお見せしたいと申されて。
一郎ちゃん　ご立派な決意ですね。
宮下　試験は前代未聞の口頭対決という形になりました。
質問も自由、答えるのも自由。ただし正解は明確なるものに限ります。
ここにいる堤男爵が審判を買って出て下さったので。
一郎ちゃん　堤さんが・・・
宮下　前例のない問答なんでうまくいくかどうかは
みなさんの紳士としての態度によって違ってきます。
どうか、広く紳士としての学問を出題し、後世の者が納得する
答えを出して下さいますように要請します。
一郎ちゃん　もちろんですとも。
白河　浅井子爵、よろしくお願いします。
一郎ちゃん　こちらこそ。
宮下　では5分後に再開します。浅井子爵はそれでよろしいですか？
お怪我の方の治療はお済みでしょうか？
野口　一応、応急処置は致しました。
宮下　結構です、それではのちほど。

華子が楽しそうに入ってくる。

華子　あなた、やったわよ。とうとう２６０倍よ。もう万馬券状態！
一郎ちゃん　お母ちゃん。
華子　あら、みなさまお揃いで…ほほほ…ロンドンの株が
上がりまして…うちの会社なものですから…
大蔵男爵　ああ、それは楽しみですなぁ。
華子　ええ、おほほほ…ひと株いかがです？
一郎ちゃん　それは言うたらアカンやろ…

華子　おほほほ……

第九場～試験

荘厳な音楽とともに３人の候補者が階段に立っている。
大蔵男爵、木原、野口、新吉は２階に控えている。
宮下と男１、２は受験者の３人よりも先に階段を下りて、
再開の挨拶をし始める。

宮下　　それでは皆様（騒つく）ご静粛に！（静かになる）
ありがとうございます。
それでは試験の再開をいたします。先程、発表させていただいた
通りにこの回の試験は学問問答です。受験者はお互いに質問し合い、
即座に答えを出していただきます。
一試合を１５分とし、三試合行ないます。
大蔵男爵　宮下、試合ではない。試験だ。
宮下　　あ、失礼しました。一試験の間違いです。すいません、
私も初めての体験なのでどうも格闘技を拝見しているような感じです。

会場からも賛成のざわめき。

宮下　　この絶大なる知識の応酬になるであろう試合の審判を、堤洋一郎
男爵にお願いいたしました。依存のある方はおられないことと思います。

盛大なる拍手。堤軽く会釈。

宮下　　では、第一試験から開始いたします。

ドラが鳴る。堤は三人の間で柔道の審判のように「開始」と
言い放つが、誰もが少しぎこちない様子。

一郎ちゃん　……
高瀬宮　　……
白河　　……
一郎ちゃん　て…天は人の上に人を創らず、人の下に人を創らず？
高瀬宮　　学問のススメ、福沢諭吉。

堤は白旗を上げる。会場からちょっとどよめき。

高瀬宮　キタラ？
白河　古代ギリシャ発弦楽器。
一郎ちゃん　月琴？
高瀬宮　中国、弦楽器。
白河　屈葬？
一郎ちゃん　旧石器時代、ムスチエ文化。死者の間接を折り曲げる世界最古の埋葬法。
白河　三傑、三子、三聖？
大久保利通、木戸孝允、西郷隆盛、老子、荘子、列子、釈迦、孔子、キリスト。

どよめきが大きくなり、拍手が起きる。

高瀬宮　後漢末・・・華佗（かた）？
一郎ちゃん　紀元前三世紀に麻酔手術をした医学者。
高瀬宮　続いて次に控えしは、月の武蔵の江戸育ち、ガキの頃から手癖が悪く、抜け参りからグレ出して・・・？
白河　忠信利平。
松王丸、梅王丸、桜丸？
一郎ちゃん　菅原伝授手習鏡（すがわらでんじゅ てならいかがみ）。
月は十六夜、ほんの欠けそめ稲妻だ、かすかな…
高瀬宮　北原白秋「初秋の夜」。
白河　どんな国の言葉でも真剣に勉強してからでなくては話せないように、まず、十分に人間というものを研究してからでなければ小説の中の人物をつくることは出来ない？
高瀬宮　デュマフィス「椿姫」。
チャイコフスキー作曲、
１８９０年サンクトペテルブルグ、マリンスキー劇場初演？
一郎ちゃん　…スペードの女王。
クロロプレン？
白河　沸点５９・４度、比重０・９５８５。
高瀬宮　痴愚神礼賛（ちぐしんらいさん）？
一郎ちゃん　１５０９年発刊。オランダ、エラスムス著
ルイス・フロイス？
高瀬宮　１５３２年生まれ、１５９７年没。ポルトガル、イエズス会宣教師。

高瀬宮　「君依於国、国依於民。刻民以奉君、猶割肉以充腹
腹飽而身斃、君富而国亡牟」
（君は国に依り、国は君に依る。民を刻（こく）してもって、
君に奉ずるはなお、肉を割（さ）きててもって、腹に充たすが如し。
腹飽きて、身たおれ、君富て、国亡びん）

白河　「聞西域賈胡、得美珠剖身而蔵之。有諸」
（聞く、西域のここは、美珠（びしゅ）を得ば、
身をさきて、これを蔵（ぞう）すと。これありや？」

高瀬宮　「有之」（これあり）

一郎ちゃん　「吏受賕抵法、与帝王徇奢欲而亡国者、何以異此胡之可笑邪」
（吏（り）のまいないを受けて法にあたると、帝王の奢欲（しゃよく）に
したがいて、国を滅ぼす者とは、何をもってこの胡（こ）の笑うべきに
異ならんや）

高瀬宮と白河が同時に続ける

2人　「昔魯哀公謂孔子曰」
（昔、魯の哀公（あいこう）孔子に謂（い）いて曰く）

高瀬宮が白河に譲る。白河は満足そうに

白河　「人有欲忘者。徒宇而忘其妻」
（人よく忘るる者あり、宅を移してその妻を忘る）

高瀬宮にお返しに譲るという合図。高瀬宮は嬉しそうに受けて。

高瀬宮　「孔子曰、又有其者。傑・紂乃忘其身」亦猶是也」
（孔子曰く、またはなはだしき者あり。傑・紂（けつ、ちゅう）は
すなわちその身を忘れる。と、またなおかくの如きなり）

3人少し笑顔がこぼれる。自分達の教養合戦を楽しむかのように。
ドラが鳴る。第一試合の終了。大きな拍手が鳴り止まない。
木原が新聞社に電話をかけている。それぞれに休憩。
お茶を飲んだり、汗を拭いたりしている。

木原　もしもし、木原です。はい、さっき始まりました。
いやもう、凄いですよ。無差別問答なんですが、出題者と回答者にしか分かりませんよ、あんな知識の応酬。
はい、速記はしてますが・・・
いいえ、堤男爵が審判に入ってます。男爵には分かるようですね。
なんせ他の３人と変わらない知識があるのは男爵だけですからね。
まさしく日本頭脳明晰四天王という感じですよ。
あ、これ明日の見出しにして下さい。

白河　やりますね、浅井子爵。
一郎ちゃん　お互いさまです。白河さんもお若いのに博学ですな。
白河　いえ、私は天才ですから。
一郎ちゃん　ははは…
白河　でもまさか、こんな問答になるとは夢にも思いませんでしたが。
一郎ちゃん　それもお互いさまです。
白河　こうなったら、お互いの弱点を攻撃するしかないですね。
一郎ちゃん　それも、知識の弱点なら立派な攻撃ですからね。
白河　知識の弱点ですか、残念ながらまったくありませんねぇぼくには。
一郎ちゃん　そりゃ凄いな。
白河　ぼくの人生はすべて勉学に捧げてきましたから。
子供のころは夜、星を見て思いましたよ。
ああ、あんな美しい星になりたいってね。
一郎ちゃん　ゲロゲロー。
白河　浅井子爵？
一郎ちゃん　いや、少し、傷が痛みましてね。

高瀬宮が電話の終わった木原に話かける。

高瀬宮　木原君。
木原　はい、宮様。
高瀬宮　新聞社に電話したのか？
木原　はい、左様でございます。
高瀬宮　そうか…
木原　新聞社にはいち早く情報が参ります。ですからただ今のところ陛下にお変わりはないはずです。
高瀬宮　気をつかわなくても良い。

木原　申しわけありません。
高瀬宮　いいんだ。ただ陛下にも私がこうして楽しんでいる姿を見ていただきたかった。それが悔やまれる。
木原　楽しんでおられる・・・試合・・いえ、試験をですか？
高瀬宮　生まれて初めて体が燃えるように感じる。
お前の言ってくれた言葉どうり、私は今、思い切り
羽をひろげて自由に闘っている。とても嬉しい…
聴衆の面前で私は生まれて初めて裸になれていると感じる。
この試験を最後まで勝ち抜きたい。
出来るならこの姿を陛下にも見ていただきたかった。
木原　宮様、きっとご報告なさることが出来ますとも。
高瀬宮　ありがとう。

ドラが鳴り、大きな拍手がおきる。

堤　開始。
高瀬宮　上古天真論、四気調神大論、生気通天論…
一郎ちゃん　黄帝内経（こうていだいけい）
高瀬宮　１６７０年、オルレアン公フィリップの妻にして、
イギリス王チャールズ二世の妹。
英仏同盟を締結させようとして毒殺された貴婦人？
白河　アンリエット・ダングルテール。
ではその娘？
一郎ちゃん　オルレアン公女マリー・ルイーズ。
『負担の多い不自由な場所に自分を縛る事だ』と言って
アウグスティヌスの跡を…
高瀬宮　ローマ皇帝、ティベリウス！
伝夜叉作、宝生宗家所蔵。「鉄輪（かなわ）」の専用面。
一郎ちゃん　橋姫。
通称イル・ティントレットと呼ばれるイタリアの画家…
高瀬宮　ヤコポ・ロブスティ「奴隷を解放するサン・マルコの奇蹟」
茨木春朔（しゅんさく）『水鳥記』の
「川崎大師川原の酒合戦」でのあざ名？
白河　地黄坊樽次。ふふん、洒落た出題ですね。ではっ
「京都の将軍、鎌倉の副将、武威衰えて偏執（へんしゅう）し、
世は戦国となりし頃、難を東海のほとりに避けて…」

一郎ちゃん　「曲亭馬琴、南総里見八犬伝」

大蔵男爵　彼らの言ってることは正解なのかね？
宮下　さあ、私には早すぎて何のことだか…
大蔵男爵　私はさっきの歌舞伎のくだりは分かったぞ。
宮下　そんな出題あったんですか？ぼくは北原白秋が分かりましたよ。
大蔵男爵　君もなかなかいけるじゃないか、宮下。
宮下　とんでもない。

一郎ちゃん　好色５人女…
高瀬宮　おさん、おせん、おまん、お夏、お七．
一郎ちゃん　ブラゲット？
白河　あ…（咳払い）中世ローロッパに流行した男性の股袋。
一郎ちゃん　されば知れ、わが息子よ。もし、誰かを愛したならば、
酔っていようと、シラフでいようと、見境なく情欲に溺れてはならぬ。
お前の肉体より出る液は…
白河　１０世紀、ペルシャ、ズイヤール王朝「カブースの書」。
堤　中止！（会場がざわめく）

大蔵男爵　何だね今のは？
宮下　分かりません。しかし、堤男爵には分かっていらっしゃるようです。
大蔵男爵　解説者がいるなぁ。
宮下　まったくです。

堤　浅井子爵、品性を問われますぞ。
一郎ちゃん　何故ですか？これはヨーロッパでは立派な歴史的文献として
大学で教える学問ですよ。ペルシャ史ですよ…
堤　う…それはそうですが。
一郎ちゃん　私は知識に反したことは申し上げていません。
堤　分かりました…再開！
一郎ちゃん　新染無類（しんそめむるい）会度睦裸咲（えどむらさき）
白河　…喜多川…月麿
一郎ちゃん　ガニカー？
白河　あ、それは…
一郎ちゃん　どうしました？白河君、君への質問だ。ヒンズー語ですよ。
白河　そんなこと言えません！浅井子爵、ぼくがこういう答えを言う

ことが出来ないと知っていて攻撃なさってるんですね。
一郎ちゃん　さっき、知識の弱点をつくのは立派な攻撃だと確認しあったじゃないですか？
白河　しまった…やられましたよ。まさかこの稀人たる私にこんな弱点があるなんて！
一郎ちゃん　どうしました？ヒンズー語でガニガーとは？お分かりになりませんか？
白河　い、いや…分かるんです…
一郎　ならば、大きな声で答えますか？
白河　ああ…それは…でも人前で…言えません！（入り去る）
堤　中止！白河稀人君、失格。

大きなどよめき。会場は賛否両論の感じ。

大蔵男爵　いったい何だね？ガニカーというのは？
宮下　さあ、何か隠語のようですが、知識がある者でないと分かりません。
大蔵男爵　これは浅井子爵の作戦勝ちだな。
宮下　続けさせますか？
大蔵男爵　もちろんだ、子爵は公明正大に出題したのだからな。
宮下　分かりました、続け給え。
堤　かしこまりました。両者中央へ。
浅井子爵、人の欠点を聞き出すのがお上手のようですな。
一郎ちゃん　とんでもない。白河君が勉強一筋に生きてきたとおっしゃったので、その側面の知識を攻撃しただけですよ。
堤　ほう、弱点をつくのもまた攻撃ですか？
一郎ちゃん　兵法にもあります。
堤　素晴らしい。おっと、失礼。旗を落としました。
一郎ちゃん　う…
堤　どうかなさいましたか？
一郎ちゃん　いや…
堤　ここの床は滑るものですから、拾いにくいですね。
あ、また滑って落ちた。
一郎ちゃん　くっそう……なんで知ってるんじゃい？
堤　おや、どうなさったんです？お嫌いなんですか？
こういう方面の忌み言葉が？
お下にはお強いのに、考えが古いですなぁ・・ねぇ高瀬宮様。
高瀬宮　（少し考えてニッコリ笑う）

２階の野口と新吉。

野口　あーしまった。
新吉　どうしたん、ノンちゃんお兄ちゃん？
野口　一郎さんが落ちる、滑るとかに弱いってこと、堤男爵は知ってるんだよ。
新吉　なんで？
野口　ぼくが教えちゃったんだ。
新吉　そのままやんか・・・
野口　たった今、白河を弱点攻撃したんだ、今度は宮様に
やり返されてしまうよ。
新吉　ええ？アカンやん、お父ちゃんあれにだけは異常に弱いで。
野口　どうしよう新ちゃん。
新吉　あとで賭け金弁償するしかないんちゃう？
野口　弁償？冗談じゃないよ。頑張ってーっ一郎さん！

堤が意味ありげに高瀬宮を見ながら合図する。

堤　再開。
高瀬宮　劇場を新築した時の……最初の興行？
一郎ちゃん　くそっ…言いよったなぁ…こけら……こけら落し！
高瀬宮　中国原産、みそはぎ科、淡褐色の植物。
一郎ちゃん　サ、サル…サルスベリじゃ！
ちくしょう、来るんやったらこいっ。
高瀬宮　お正月に子供たちが一番楽しみにしている・・

ドラが鳴る

堤　第二試験終了。
一郎ちゃん　ふーっ助かった。
高瀬宮　ははは。（何だか余裕の表情で飲み物を手にする）
大蔵男爵　何だね？今のは…
宮下　さあ、サルスベリがそんなに難しいんでしょうかねぇ。
白河　その答えは私がご説明致します。
大蔵男爵　わーっビックリした。なんだ君は白河君じゃないか。
白河　そうです、閣下。浅井子爵にまんまと作戦負けした白河稀人です。
大蔵男爵　だから？

白河　負けてしまったので、することがありません。そこで私が閣下に
この後の第三試験の対決の解説をして差し上げようかと思いまして。
大蔵男爵　解説？
白河　ただ見ているだけでは、お分りにならないことも多いはずです。
こんなことを申し上げてはなんですが、日本一の天才の試合なので
同レベルの者でなくては閣下に解説も出来ません。
その点、私ならばその資格十分かと存じます。
宮下　閣下、どういたしましょう？
大蔵男爵　彼が挫折感を感じない強靭な精神力の持ち主で良かったよ。
宮下　解説はさせるんですか？
大蔵男爵　ちょうど解説者は求めていたところだ。
宮下　そうですね。
大蔵男爵　させ給え。
宮下　分かりました。

三度ドラが鳴る。

高瀬宮　これが決着をつける試験ですね、浅井子爵。
一郎ちゃん　はい、宮様。
高瀬宮　楽しいですか？
一郎ちゃん　はい。宮様とこうしてお会いできたのも、勤勉に努力してきた
おかげですから。
高瀬宮　私も楽しいです。手は抜きませんよ。
一郎ちゃん　ご心配なく。弱点を攻められても、私には対処する勇気がございますので。
高瀬宮　そんなことはしません。もっと楽しみましょう。
一郎ちゃん　何ですって？
堤　開始。

２人はちょっと様子を伺っている。一郎ちゃんは
さっきの高瀬宮の言葉が気になってる様子。

高瀬宮　須磨、明石、関屋？
一郎ちゃん　地名…いや、源氏物語。
高瀬宮　クコ、勿忘草、氷室桜、枯れすすき、探梅（たんばい）？
一郎ちゃん　ふふん・・・季語。

白河　今のお分りですか、閣下？高瀬宮様が一見地名と聞かせておいて
源氏物語の各タイトル、花と思わせておいて俳句の季語を
出題したんです。ひねりましたねぇ。

木原　ほう。（メモる）

宮下　やっぱり、こういう人がいるとこの対決は一段と面白くなりますね。

大蔵男爵　まったくだ。

高瀬宮　ははは…平征子？

一郎ちゃん　北条征子。

高瀬宮　有盛？

一郎ちゃん　小松の少将

高瀬宮　藤若？

一郎ちゃん　世阿弥

白河　これは単純に聞こえますが、あだ名と本名の違いを言い合ってます。
大変高度な言い合いになってますね。

大蔵男爵　そうかね。

高瀬宮　一寸先は闇

一郎ちゃん　犬も歩けば棒に当たる。

高瀬宮　針の穴から天井覗く。

一郎ちゃん　花よりダンゴ。

高瀬宮　馬の耳に念仏。

一郎ちゃん　嘘から出たまこと。

白河　あはは…これも面白い！

大蔵男爵　いた、なにが面白いんだね？

白河　閣下、これもご存知ありませんか？上方と江戸のいろはカルタの
違いを言い合ってるんですよ。
しかも高瀬宮様が上方、浅井子爵が江戸を言ってます。
出身地を入替えてるんですね。面白いなぁ。

大蔵男爵　そりゃ、良かったなぁ。

高瀬宮　ヘル（hell）【明るい】

一郎ちゃん　うん？…ドゥンケル（dunkel）【暗い】

高瀬宮　（嬉しそう）グート（gut）【良い】

一郎ちゃん　シュレヒト（schlecht）【悪い】
高瀬宮　ははは…ルスティヒ（lustig）【楽しい】
一郎ちゃん　トゥラウリヒ（traurig）【悲しい】

白河　今度はドイツ語で反語を言い合って会話してますね。
高瀬宮さまは楽しいと。
宮下　浅井は悲しいわけですか？
白河　そのとうりです。
大蔵男爵　やるじゃないか宮下
宮下　有難うございます。勘です。

高瀬宮　一局、一手、一番？
一郎ちゃん　…将棋。
では、一張り、一張（いっちょう）
高瀬宮　提灯…鼓。
一郎ちゃん　一りゅう？
高瀬宮　鯉のぼり。

大蔵男爵　これは何だね？
白河　物の数の数え方です。
大蔵男爵　鯉のぼりに数え方があるのか？

一郎ちゃん　なんでや・・・何で忌み言葉を攻めてけぇへんのや？
高瀬宮　浅井子爵、私は今まで人生がこんなに楽しいとは思っていませんでした。
私は誰にも遠慮することなく、聴衆の前で自分を曝け出している。
素晴らしい気持ちです。
一郎ちゃん　何やと？
高瀬宮　答えて下さい、私の出題に！
一郎ちゃん　おう、そのつもりじゃい。
高瀬宮　２・０１ヤード？
一郎ちゃん　１・８３７９４４ｍ。
高瀬宮　０・８フィート？
一郎ちゃん　２４・３８４㎝。
高瀬宮　二升五合？
一郎ちゃん　４・５０９６４リットル。
…０、６２９３バーレル？

高瀬宮　1リットル。
一郎ちゃん　しもた・・・

大蔵男爵　どうやって計算しとるんだ？
白河　策士策に溺れるというやつですね。

高瀬宮　お七夜、宮参り、食初祝、初節句、七五三…
一郎ちゃん　男は元服、女は十三参りやろ。
高瀬宮　ははは…騙されませんでしたね。さすがです、では釈迦４大聖地？
一郎ちゃん　ルンビニ、サールナート、クシナガラ、ボードガヤ。
高瀬宮　ビィンスフェルト、７大悪魔
一郎ちゃん　ルシファー、アモン、アスモデウス、ベルゼブブ、レビヤタン
ベルフェゴール、サタン。
高瀬宮　近松門左衛門（ちかまつ　もんざえもん）心中もの以外で五作？
一郎ちゃん　「傾城反魂香」（けいせい　はんごんこう）
「女殺油地獄」（おんなごろし　あぶらのじごく）
「国性爺合戦」（こくせんやがっせん）
「輝虎配膳」（てるとら　はいぜん）
「出世景清」（しゅっせ　かげきよ）
高瀬宮　ははは…江戸期。蝦夷、十大地方名
一郎ちゃん　何を笑うとるんや！江戸時代の蝦夷やとぉ…
渡島（おしま）後志（しりべし）胆振（いぶり）
石狩（いしかり）日高（ひだか）天塩（てしお）
北見（きたみ）十勝（とかち）釧路（くしろ）根室（ねむろ）
高瀬宮　十二神将？
一郎ちゃん　くそっ、ややこしいことばっかり言いやがって…
クビラ、バサラ、メキラ、アンテラ、アニラ、サンテラ、
インダラ、ハイラ、マコラ、シンダラ、ショウトラ、ビカラ。
どうや！こっちもいくでぇ、
歌舞伎十八番？
高瀬宮　助六…など！
一郎ちゃん　しまったっ！…うっ（キズを押さて、膝をついてしまう）
はぁ…はぁ…
野口　やばいな、新ちゃん。一郎さんの体力でも限界だよ。
新吉　ええ？お父ちゃん、儲けそこなうぞ！
一郎ちゃん　・・・よっしゃー！

新吉の声で立ち上がる一郎ちゃん。

高瀬宮　では、これはどうですか？「空中大飛行艇」「怪人鉄塔」「海底軍艦」作者？
一郎ちゃん　…聞いたことあるぞ、何や…新吉のあれか！
…春の浪と書いて、押川春浪（おしかわ しゅんろう）。
高瀬宮　知ってましたね、浅井子爵。
白河　これは凄い。2人とも最近の若者の読むＳＦ小説にも知識があるようですね。
大蔵男爵　へぇ。
白河　ご存じじゃないんですか？「冒険世界」？
大蔵男爵　面目ない、若者の雑誌までは読まんのだよ。
宮下　しかし、ＳＦ小説にまで手を広げるとは、まったくお2人ともに
物凄い知識量ですねぇ
大蔵男爵　まったくだ。
高瀬宮　ロンジン、オメガ、エドックス、モーリス、ウォルサム、ローレックス？
一郎ちゃん　何？
大蔵男爵　粋な質問だな。

観客が笑う。

一郎ちゃん　……懐中時計。

拍手がおきる。

一郎ちゃん　何や、時計ぐらいで？…まてよ…
高瀬宮　紳士靴５種類？
一郎ちゃん　ええ？乗馬をするなら…サイドゴア・ブーツ、一文字飾り…
ちょっと気取ってウイングチップ、コンビネーション、ケーブルアップ！

またまた拍手が起きる。

野口　一郎さん、ぼくが一回教えただけなのによく覚えてるなぁ。
新吉　まずいで、ノンちゃんお兄ちゃん。宮様の出題が洋服、
小物関係に向いていたで…
野口　本当だ。高瀬宮様は皇族一のモボだからなぁ
新吉　お父ちゃん、あんなん知らんからなぁ
一郎ちゃん　こいつ、皇族のくせにチャラチャラしたことぬかしとるぞ…

困ったな。何がモボや、何が新青年じゃ、ほんまに
そんな雑なもんが学問に入るかっ…待てよ…
雑なもんか…新吉の言うとったあれか…
ええぇ…これも知識じゃい…渦巻き？

高瀬宮　何？

ざわめきが起きる。

堤　中止！浅井子爵、今の質問では漠然としすぎてますぞ。

一郎ちゃん　はい、分かりました。

堤　よし、では再開！

一郎ちゃん　渦巻き、糸巻き、あご当て、緒止め、糸蔵などの名称を持つ楽器？

高瀬宮　何？…渦巻き…渦巻き…あご当て…
そうか、バイオリンだ！

高瀬宮は答えたが、旗をあげていいのかどうか解らない堤男爵。

高瀬宮　違うのか？

堤は一瞬、ためらうが一郎ちゃんの顔色を見て白旗を上げる。

一郎ちゃん　それでは、手もと、骨、中棒、下ろくろ、石突などの名称をもつものは？

高瀬宮　手もと…中棒…

大蔵男爵　白河君、いったい浅井子爵は何を質問しているんだ？

白河　さあ、私にもこれは…

高瀬宮　…骨…傘か？

一郎ちゃん　はははは…さすがに勘がいいですね。
それじゃあ、これが留めだ！
柄、柄穴、鏡、側面、丸頭といえば何の道具？

高瀬宮　柄…鏡？ダメだ分からない！

一郎ちゃん　ははは…そうでしょうとも。宮さまは一生お使いになることはないでしょうから。

堤男爵　高瀬宮様。

高瀬宮　（爽やかに負けを覚悟して）分かりません。

堤　宮様…

大蔵男爵が階段の真ん中あたりで叫ぶ。

大蔵男爵　中止です！試験は中止に致します。
一郎ちゃん　何やて？
堤　大蔵男爵！
大蔵男爵　…たった今、天皇陛下がお隠れになられました。
試験は…中止に致します。
高瀬宮　そんな…
一郎ちゃん　アホな…（一郎ちゃんは気絶してしまう）

会場は大騒ぎ。高瀬宮は階段に座り込むと泣きだす。
堤が宮の側になす術なく立っている。大蔵男爵も下りてくる。
野口は手際よく一郎ちゃんを寝かせると新吉と白河に指示。
木原は新聞社にまた電話をする。宮下が横で見守る。
華子が入ってきて一郎ちゃんに介抱をする中・・・暗転。

第十場〜門出

木原が深夜の大蔵男爵邸の窓の下にいる。
小石を投げて莉奈の部屋の窓に当てる。
気がつく莉奈。

莉奈　まぁ、…どうしたの？
木原　ちょっと下りてきてくれませんか？
莉奈　ええ、いいわ。
木原　ありがとう。

まだ寝ていなかった様子の莉奈。ショールを肩にかけて下りて来る。
木原も試合会場から直接来た感じ。だが、タイは緩められ、上着は手に持って
ラフな格好ではある。

莉奈　こんな夜中にどうなさったの？お父様だったらまだお帰りではないわ。
きっと、今夜はもうお帰りにならないと思うわ。
木原　分かってる、だから来たんだ。
莉奈　え？
木原　今夜はこの屋敷に誰も帰って来ない。うちの新聞社もごったがえしてます。
誰もいない、そう分かっていて来たんですよ。
莉奈　どういう事？
木原　莉奈…お嬢さん…
俺は前にも言ったとおり裸同然だ。ただの新聞屋で、一文無しです。
莉奈　ええ。
木原　いつ服が着られるのかは分からない。
莉奈　知ってるわ。
木原　……
莉奈　……はっきり言って下さらなきゃ、何も分らないわ。
木原　…意地悪だな…
莉奈　どうして、いらしたの？
木原　今日の試験を見てて。
莉奈　試験？公開試験ね。嗚呼、凄かったわね。
こんなこと言ったら申し訳ないけど、陛下のことがなかったら、
後世に語り継がれていたでしょうに。
木原　ああ、昂奮したな。心から本当に感動した。

莉奈　私もよ。
木原　裸一貫からのし上がった浅井一郎も、恵まれて育ったにもかかわらず、自分の実力を一度も示す機会のなかった高瀬宮も…
…とても眩しかった。
莉奈　ええ。
木原　２人とも必死で、汗をかいていた。自分達以外の人間に目もくれず、ただ闘っていた。力の限り羽を伸ばして…
莉奈　高瀬宮様の望んだ闘いが現実になって嬉しかったわ。
木原　あれがこの時代の男の生き方だ。
莉奈　そうね…
木原　俺は今日、なんだかんだ理由をつけて逃げていた自分を恥じましたよ。今、思った時にやらなくていつやる！そう思わない人間はしょせん一生行動は出来ないんだって思い知った。
莉奈　今夜はお喋りね、あなた。
木原　莉奈…
梨奈　え？
木原　俺と…俺と一緒に来てくれ。
嫌なら諦める、ただ言わないで済ますのは止めにした。
莉奈　……
木原　あなたが選んでくれ、こんな貧乏人でよかったら…
莉奈　本当に惨めなのは心が貧しい人のことよ。
あなたは貧乏人じゃないわ。
食べる事より、想う事の方が大切だって知ってる人ですもの。
木原　いつの間にそんな大人の女が言うような言葉を身につけたんです？
莉奈　華族の教育の一環よ。
木原　ははは…
莉奈　ふふふ…
木原　俺の人生はどう転ぶか解らんが、あなたという人の灯りが必要だ。
それで俺は迷わずにすむ。
莉奈　私のどこが好きなの？悪口を言ってる時？
木原　ははは。あなたが発するものが何であれ、問題はそこから発してるという事だ。だが…あなたは俺でいいのか？
莉奈　意地悪ね、女に２度押しするのは失礼よ。
木原　失敬…そのとうりだ。
（時計を見る）社に戻らなきゃ…抜けてきたからね。
莉奈　公開試験に感謝しなきゃいけないわね。

木原　そうだな、しかしこれで俺はこれから、あなたの親父さんと闘わないといけないんだ。感謝してる場合じゃないよ。
莉奈　ふふふ…宮下秘書官とも闘ってね。
木原　え？
莉奈　お父様が宮下秘書官と結婚させようとしてるみたいだから。
木原　宮下さんかぁ……苦手だな…
莉奈　思った時にやらなくて、いつやるの？
木原　はぁ…お転婆に求婚しちまったな。
莉奈　会社にいってらっしゃい…。
木原　ああ、分ったよ。
莉奈　ありがとう…嬉しかったわ。
木原　もう止めよう、さっきのは一生に一度の弱音だ。
　　男には2度押しするな。
莉奈　まぁ…
木原　あ…

2人は見詰め合って笑う。

木原　じゃ、行くよ。
莉奈　ええ。

木原はそのまま莉奈の手をとるがすぐに離し、
少し恥ずかしそうに出て行ってしまう。
莉奈は玄関まで彼の後を追って見送る。

第十一場〜その後

新吉と野口がお茶を飲みながらバタバタしている。出掛ける様子。

野口　今日は資生堂のソーダファウンテンを飲もうよ、新ちゃん。
新吉　あれシュワシュワしてて嫌や。
野口　何言ってるんだい、それがいいんじゃないか。
　　あれに比べたら柳屋のソーダ水なんか目じゃないよ。
新吉　ぼくは絶対、本屋さんに行くで。
野口　いいとも、何か雑誌を買ってあげるよ。
新吉　それはええから資生堂パーラーのメニュー貰ってくれへん？
野口　メニュー？そんなものが欲しいのかい？相変わらず変わってるなぁ
　　新ちゃんは。
新吉　ええやん、なぁ貰ってなノンちゃんお兄ちゃん。
野口　いいよ。
新吉　やったー！
華子　新ちゃんも、ノンちゃんも行く用意できた？
新吉　うん、お父ちゃんは？
華子　まだ横になってらっしゃるわよ。寝かせておいてあげなさい。
　　昨日、退院してきたばっかりなんだから。
新吉　うん。でも朝ごはんは食べるんちゃう？
華子　そうねぇ…でも、お母さんも予約した店があるから急いでるのよ。
新吉　ふーん。
華子　そうだ、じゃあ、新ちゃんお昼ごはんに間に合うように
　　いらっしゃいな。お母さんはどうせ、お洋服屋さんで２時間ぐらい
　　お喋りしながら買うから、ノンちゃんにその間に迎えに
　　きてもらえばいいじゃない。ねぇノンちゃん。
野口　ぼくはいいですよ。自動車の運転が出来るなら何往復でも。
新吉　ほんまにええのん？
野口　気を使い給もうな、我らは仲間ではないか。
新吉　あはは…分かった、じゃあお父ちゃんに目玉焼き作って
　　あげてからにするわ、本屋さんに行くのん。
華子　でも、無理に起こさないのよ。いいわね？
新吉　分かってる。
華子　じゃあ、先に行ってくるわ。後でね新ちゃん。
新吉　うん、後でねー。

野口　１１時には迎えに来るよ。
新吉　うん、ありがとう。

２人はけたたましく出ていく。車の音が遠ざかる。
新吉はお片付けを始めている。そこに一郎ちゃんが入ってくる。
和服姿で右腕を吊っている。

一郎ちゃん　ふぁー…何や新吉、朝からやかましいなぁ
新吉　お早よう、お父ちゃん。
一郎ちゃん　お早ようさん。なんやお前、えらいお洒落な格好してるやないか？
新吉　お父ちゃんも洋服をお洒落と言うようになったんかいな。
一郎ちゃん　生意気言うな。どうしてん？
新吉　後でお母ちゃんらと銀座でごはん食べるねん。
本屋さんにも行ってくれるって。
一郎ちゃん　そうか、良かったな。何かおもろそーな本があったら買うてきてくれへんか？
新吉　いいよ、お金ちょうだい。
一郎ちゃん　ケチ臭いこと言うなよ。
新吉　お父ちゃんに立て替えると返ってけぇへんもん。
一郎ちゃん　ちぇ、だんだん可愛いのうなってくるなぁ、お前は。
新吉　誰に似たんやろうなぁ。
一郎ちゃん　やかましいわぃ。朝ごはんは？
新吉　目玉焼きの用意はしてあるで。
一郎ちゃん　お、ええぞぉ…病院のメシまずかったからなぁ。早う焼いてくれ。
新吉　うん。
一郎ちゃん　ほんま、お前の手料理がわしの一番の好物やで。
新吉　ごはんの後でお薬飲みや。ノンちゃんお兄ちゃんに怒られるで。
一郎ちゃん　分かってるわぃ、あのヤブ医者が。
新吉　もうちょっとで神経切れてしまうとこやってんから、
ノンちゃんお兄ちゃんにも感謝しぃや。
一郎ちゃん　うるさいなぁ、早う目玉焼き！
新吉　はーい。
一郎ちゃん　ほんまに小姑みたいな性格やで、うちの息子。

玄関の呼び鈴が鳴る。

一郎ちゃん　誰や、新吉！おい、お客さんや。聞こえとらん…しゃあないなぁ。

一郎ちゃんが玄関に行って客を迎える。大蔵男爵である。

一郎ちゃん　やぁ、これは大蔵男爵。宮下秘書官も…
よくいらっしゃいました。どうぞ、どうぞ。
宮下　浅井子爵、退院おめでとうございます。
一郎ちゃん　いや、そんなご丁寧に、ありがとうございます。
大蔵男爵　いかがですか？病院の方にお邪魔しようと思っていたのですが
ご崩御のあと、なにかと忙殺されておりましてなぁ。
一郎ちゃん　そらそうでしょうね。いやぁ私の怪我なんかにお構いになる時間は
おありにならないでしょう。
大蔵男爵　いやいや、本日、退院とお聞きしてぜひ伺わねばと思って
こうして参上しました。
浅井さん！（いきなり土下座する）
一郎ちゃん　大蔵男爵、やめて下さい。どうなさったんですか？
大蔵男爵　私が…やらせたのです。
一郎ちゃん　は？
大蔵男爵　あなたの右腕に、重症を追わせた刺客を雇ったのは私なんです。
一郎ちゃん　あなたが？
大蔵男爵　許して下さい。元より、あなたには何の遺恨もありません。
ただ、あの時に私は陛下を喜ばせて差し上げたかったのです。
あの公開試験の前日、陛下に召されて宮中にお伺いした際、
もうお長くはないとお聞きしていました。
病床から私に、高瀬宮を頼むと…陛下は高瀬宮様に何も
してやれなかったと泣いておいでした。
浅はかなのは重々承知していましたが、私はどうしても高瀬宮様を
首席代表にして差し上げたかったのです。
どうか許して下さい、浅井さん。
あ、どうか存分になさって下さい！
一郎ちゃん　手を…上げて下さい。
大蔵男爵　浅井さん！
一郎ちゃん　私は賊に襲われたんです。閣下の忠誠心をお聞きしても仕方ありません。
大蔵男爵　浅井さん…
一郎ちゃん　それに、もう済んだことです。久しぶりに試験なるものを受けて
燃えました。私の満足はそんなところです。

閣下のように時代を作っていらっしゃった方に
頭を下げていただく者ではありません。
大蔵男爵　浅井さん、すまない…すまない。
一郎ちゃん　さあ、お立ち下さい。息子が奥におりますので、どうか。
大蔵男爵　ありがとうございます。
宮下　浅井子爵、これは閣下からのお見舞いの品です。お納め下さい。
一郎ちゃん　いや、見舞いなら病院に花を頂きましたんで。
宮下　閣下のお気持ちですので。
一郎ちゃん　分かりました。ありがとうございます。
大蔵男爵　マドレーヌです。
一郎ちゃん　はぁ
宮下　それから、高瀬宮様からのご伝言です。
一郎ちゃん　宮様から？
宮下　この度は残念ながら中止になりましたが、時と場所をオックスフォードに移して一度戦いましょう。今度は世界規模でとそうおっしゃっておられました。
一郎ちゃん　ははは…受けて立ちますとお伝え下さい。
大蔵男爵　ありがとう、浅井さん。宮様はすっかり大きくなられた。あなたのおかげです。
一郎ちゃん　いいえ、私なんか…何もお役に立っていませんよ。
宮下　閣下、お時間が…
大蔵男爵　そうか。では浅井さん、いや浅井子爵、またお目にかかりましょう。
一郎ちゃん　はい、今度はお屋敷のパーティに伺いますよ。洋服を着て。
大蔵男爵　ははは…ぜひ、いらして下さい。待ってますよ。
一郎ちゃん　ありがとうございます。
大蔵男爵　では、失礼いたします。
一郎ちゃん　わざわざ、ありがとうございました。
宮下　どうも。

一郎ちゃんは感慨深気に見送る。新吉が朝食セットを持って立っている。

新吉　堤男爵がやったんとちゃうかったんや。
一郎ちゃん　新吉、聞いてたんか？
新吉　別に。
一郎ちゃん　まぁ世の中にはそう悪い奴ばっかりおらへんちゅうことやな。
新吉　今の話に感動したん？
一郎ちゃん　いいや、関心しただけや。忠誠心ちゅうもんにな、

わしら貧乏人の子せがれやから、分からんわ。
新吉　ごはん、出来たで。

玄関に車の音、野口が下りてくる。

野口　新ちゃん、ちょっと早いけど帰ってきたよ。
一郎ちゃん　あ、一郎さん、起ききたんですか？
新吉　おう、お早ようさん。
野口　お母ちゃんは？
一郎ちゃん　うん、華子さんは放ってきちゃったよ。
野口　洋服屋のサロンでドレスを着だしたからさぁ。
一郎ちゃん　ドレス？またかいなぁ。
野口　いつもよりすざまじいですよ。フランスから入って来たっていうウエディングドレスを試着してましたからね。
一郎ちゃん　何やそれ？
野口　結婚式で花嫁が着るドレスですよ。
一郎ちゃん　何やて？お母ちゃん、なんでそんなもん着てるんや？
野口　さぁ、再婚でも考えてるんじゃないですか？
一郎ちゃん　ああ、再婚なぁ…って、アホ！冗談やないぞ、こらっ。
野口　あははは…大丈夫、大丈夫。華子さんが一郎さん以外の男性と再婚するなんて考えられませんから。でも一郎さんと再婚するかもしれませんね。
一郎ちゃん　何？どういうこっちゃ？
野口　いや、つまり・・・あのドレスを着たいばっかりに、もう一度結婚式をやりかねないなって…あはは…
一郎ちゃん　何を言うとんねん…あはは…アカン。
野口　どうしました？
一郎ちゃん　わしら駈け落ちやったから式ちゃんと挙げてへんねん。その想像はごっつい当たってるかもしれん！
新吉　あはは…ほな、お父ちゃん、燕尾服着て結婚するんか？
一郎ちゃん　新吉、ノンちゃん、早う行って止めてこい！頼む！
野口　はいはい、分かりました。行こう、新ちゃん。
新吉　うん。行ってきます、お父ちゃん。
野口　あ、一郎さん、もしかしたら華子さん、帝国ホテルも予約してるかもしれませんね。
一郎ちゃん　はよ、行かんかい！

２人はご機嫌で出掛ける。

一郎ちゃん　何で２人とも嬉しそうにしとるんや・・・ほんまに勘弁してくれよ。
嫌やで、わしは洋式の結婚式なんか。あんな燕尾服なんか着て
写真なんか撮られてたまるかぁ…
写真…自体がもう真っ平じゃい…
あーあ、何でみんなそんなゼニにならんことばっかり
やりたがるねん！
そう言えば、さっき宮さんの伝言がどうとか言うとったな。
あー、うっとしい。何がオックスフォードでお会いしましょうや！
わしにイギリスまで行けちゅうんかい、船賃もってくれんねやろな
第一、あの１００人分の旅行グッズどないしてくれんねん。
儲けそこなった分取り返すのにまたあのややこしい試験するんかい
ほんまに手のかかる話やで。あー、もうしゃらくさい若造やで。
何か得する話はないんかいな。
お、そうや、さっきの包みや、これは何かあるやろ・・膏薬代とかなんとか
書いてある包みかなんか…えへへ
山吹色のお菓子ですとかなんとか（マドレーヌを見て）
ほんまに山吹色のお菓子だけやないかい！普通何か入れるやろう。
何やねん、あのお上品な連中は！けったくそ悪いのう…
メシや、メシ。もう構うてられんわっ。
あー、なんやこの目玉焼き！新吉の奴、わしが硬焼きやないと
嫌やいうのん知ってるくせに！わしはお前チュウチュウできへん
言うてるやろ！まして今は右手が使われへんのに（目玉焼きを食べ始める）
あー、ほらみてみぃ、黄身がつぶれてしもた…ああ、
もう１日台無しやで今日は・・あいつら何やと思うとるんや…ほんまに！
何がパーティや、何がオックスフォードや。
今度こそ儲けたるでぇ。
わしを誰やと思うとるやっ。
アイ アム イチロー アサイじゃい！

自分では決まってるつもりの一郎ちゃん。

暗転

出演者その後の生涯（おまけ）

浅井一郎

公開試験後、すっかり有名人になり新聞でコラムも書く。
３つの大学の栄誉教授になり、福沢諭吉の向こうを張って
「新・学問のススメ」を出版。バカ売れする。
楽しむ学問を啓蒙しそれが今日のクイズの原型となっていく。
商売の方でもぬかりなく、「一郎ちゃんの勉強セット」という
学童用の筆記具を売出し当てる。
昭和１２年。心筋梗塞で急死。６２歳。
最期の言葉は「お母ちゃん、無駄遣いすんなよ」

浅井華子

一郎ちゃんと仲良く暮らす。彼の稼いだお金で買物を続け、
ついにその流行に敏感な才能を生かしてリーズナブルな商品を供給する
庶民向けの洋服メーカーを作る。生涯実家のお金には手を
着けず、第２次大戦後子爵家の財産は赤十字に寄付する。
昭和３０年、７５歳で亡くなる。
最期の言葉は「来年の流行色は緑よ」

浅井新吉

父とともに洋行を繰り返し、好事家として名をなす。
西洋アンティークの専門店も開き、自ら若者向きの雑誌を出版。
昭和１５、年第２次大戦中に南洋で戦死。４５歳。
最期の言葉は「ハワイのアロハは値打ちが上がるで」

野口敬二郎

帝大医学部を無事卒業。何故か日本でも有数の外科医になる。
しかし、その多くは戦争中に実戦で学んだ人体の切り張り知識。
昭和４５年に８２歳で亡くなる日まで現役の医者として活躍。
死後、国民功労賞を送られる。
最期の言葉は「手術は洋服を縫うのと同じようなものさ」

白河稀人

早稲田大学を優秀なる成績で卒業。転じて映画の弁士になる。
曰く「私が好きなのは知識を人に喋ることなのです」対訳も出来、
喋れるので映画界に君臨し、トーキー時代になるとすぐに映画の
解説者になり人気を博す。
昭和４０年、７５歳の時に口頭ガンで死亡。
最期の言葉は「これでモンローに会える」

堤洋一郎

あの公開試験後に洋行、イタリアで史学の大家となる。
イタリア人女性と結婚。妻のおかげで冷静沈着な性格は１８０度変わり
途中ムッソリーニ政権から追われたりもするが、陽気なイタリアのおっさん
として無事に暮らし、戦後はイタリア映画の紹介記事なども書く。
昭和３８年、７８歳でチーズを喉につまらせて死亡。
最期の言葉は「ううっ旨い」

木原雄吉

試験の翌年、莉奈と結婚。
東京日々新聞の報道部長になり、鬼の木原と異名をとるが、
第１次大戦中に政治に嫌気がさし退社。転じて芝居の脚本などを書き始める
第２次大戦中に政治犯として投獄され、その体験を書いた芝居が
オフ　ブロードウエイで大ヒットになる。
昭和３３年、アメリカで心臓病のため客死。７３歳。
最期の言葉は「私はまだ裸だ」

宮下義春

大蔵男爵とともに政界を生き抜き、自分自身もやがて議員になる。
第２次大戦中に投獄されるが、戦後そのことでハクがつき
大物政治家にのしあがる。
が、その華やかな政治家生活を送る反面、何故か伴侶にめぐまれず、
一生を独身で暮らす。
昭和４５年、万国博覧会に一役買って満足して死ぬ。８７歳。
最期の言葉は「こんにちは、こんにちは～世界の国から」

大蔵建造

例の公開試験後、その画期的な試みを買われ、米国に招かれる。
多くの政治家との付き合いの中から勤勉に書き留めた著書を出版。
欧米ではベストセラーとなるが、日本人には受け入れなかった。
木原と莉奈の間には最初反対していたが、やがて満足し、孫を可愛がり
出したら止らない一面も見せるようになる。
第１次大戦の時に帰国。
大正１０年中国訪問中にデモに巻き込まれ刺殺される。５５歳。
最期の言葉は「これで陛下のおそばに行けるぞ」

高瀬宮

大正に入ってすぐにイギリスに渡り、オックスフォード大を優秀な
成績で卒業。帰国して日本の教育制度に一生を捧げる。
特に奨学金制度には心血を注ぐ。
大正期、結核で若くして病死。３７歳。

最期の言葉は「浅井さんに来てもらってくれ」ともう一度
一郎ちゃんとの勝負を望んだという。

大蔵莉奈

試験の翌年、木原と結婚する。
２つの大戦、夫の投獄などもあり苦労はするが３男４女を産み、
木原家の支えとなって一生を送る。
昭和３４年、ガンで死亡。６７歳。
最後の言葉は「天国に灯りを持って照らしに行って上げないと、
あの人が立ち往生してるわ」

登場人物

浅井一郎（３５歳）
極度の守銭奴だが、異常に知識があることと、正義漢が強いのが性格的特徴。ともかく熱い人。
情愛に溢れ、家族を愛しているが、お金も愛している。
超日本男児的なところがあってあまり日本の西洋化を好まない。

浅井華子（３０歳）
一郎ちゃんの奥さん。元々は華族のお姫さまだったが、
一郎ちゃんと結婚して人生観が変わってしまう。
しかし明治という時代のスタイルに翻弄されていて買物が大好き。

浅井新吉（１２歳）
一郎ちゃんの息子。時代に対して新しい感覚がある子供らしい子供
一郎ちゃんが大好きなので父親の面倒をよく見る。

野口敬治郎（２２歳）
華子の従兄弟で、時代のモダンボーイ。最初は一郎ちゃんの素行をあまり歓迎していなかったが、やがて彼の情熱に影響される。
帝大医学部在学中の医者の卵。

大蔵男爵（４５歳）
華族議員のひとりで明治天皇に傾倒している。
文部省に意見力があり、英国に大留学団を送る計画を立てる。
一郎ちゃんに通じる熱い性格。

宮下義春（２７歳）
大蔵男爵の第一秘書官。実直な性格で男爵に傾倒している。
華族社会と権威が大好きな政治家志望の青年。

白河稀人（３２歳）
早稲田大学でしつこく学科を変えては主席を取り続けてる天才。
異常なほどの知識を持ち、喋るのが大好きな明治時代のオタク君。

堤男爵（２５歳）
京大大学院に所属している歴史学者。プライドが高く華族であることから抜けられない典型的なブルジョワジーの申し子。
一郎ちゃんをあまり良く思っていない様子。

木原雄吉（２５歳）
大蔵男爵の書生だった時期もあり、彼のお気に入り新聞記者。
男爵の娘、梨奈に密かな恋心も寄せている。
時代は開けてきたが、まだまだ変わると予感している若者。

高瀬宮（２７歳）　明治天皇の隠し子。皇位継承１２位にいながら皇室の中でも特異な存在。その隠された人生を空虚と絶望のままに生き、知識欲にウサを晴らしてきた天才。

リナ（１８歳）　大蔵男爵の愛娘。父の影響で先進的な考え方をする。華子とは、また違う新しい時代に生きようとする少女。

写真屋　一郎ちゃんを襲う刺客。

大久保　大蔵男爵配下の役人。